茨城県教育財団文化財調査報告第148集

一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

坂　遺　跡
船戸内遺跡
小原遺跡

作業室用

平成11年3月

茨　城　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第148集

一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

坂（さか）遺跡
船戸内（ふなと うち）遺跡
小原（おばら）遺跡

平成11年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，長期的な展望のもとに，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めております。

一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事は，その一環として計画されたもので，その予定地内には，坂遺跡をはじめ多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，坂遺跡，船戸内遺跡，小原遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理作業を進めるにあたり，委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し，深く感謝申し上げます。

また，茨城県教育委員会，霞ヶ浦町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成11年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋　本　　昌

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成８年４月から同年６月まで発掘調査を実施した茨城県新治郡霞ヶ浦町に所在する坂遺跡，船戸内遺跡及び平成９年８月に発掘調査を実施した小原遺跡の発掘調査報告書である。

なお，３遺跡の所在地は次のとおりである。

坂遺跡　　茨城県新治郡霞ヶ浦町大字坂字平2,003番地の１ほか

船戸内遺跡　茨城県新治郡霞ヶ浦町大字田伏字船戸内3,778番地の１ほか

小原遺跡　　茨城県新治郡霞ヶ浦町大字宍倉字小原3,514番地ほか

2　坂遺跡，船戸内遺跡及び小原遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		橋本　昌	平成７年４月～
副理事長		中島弘光	平成７年４月～
		齋藤佳郎	平成８年４月～平成10年３月
		川俣勝慶	平成10年４月～
常務理事		梅澤秀夫	平成８年４月～平成９年３月
		齋藤紀彦	平成９年４月～
事務局長		小林隆郎	平成８年４月～平成９年３月
		西村敏一	平成９年４月～
埋蔵文化財部長		沼田文夫	平成８年４月～
埋蔵文化財部長代理		河野佑司	平成６年４月～
企画管理課	課長	小幡弘明	平成８年４月～平成９年３月
	課長	河崎孝典	平成９年４月～平成10年３月
	課長	鈴木三郎	平成10年４月～
	課長代理	根本達夫	平成６年４月～
	課長代理	清水　薫	平成９年４月～平成10年３月(平成８年４月～平成９年３月係長)
	主任調査員	小高五十二	平成８年４月～平成10年３月
	主任調査員	池田晃一	平成10年４月～
	主任	川崎敦司	平成10年４月～（平成10年４月～平成10年９月主事）
経理課	課長	河崎孝典	平成８年４月～平成９年３月
	課長	鈴木三郎	平成９年４月～平成10年３月
	課長	佐藤　健	平成10年４月～
	主査	田所多佳男	平成８年４月～
	課長代理	大高春夫	平成６年４月～平成９年３月
	課長代理	清水　薫	平成10年４月～
	主任	小池　孝	平成７年４月～平成10年３月
	主任	宮本　勉	平成９年４月～
	主任	木下光保	平成10年４月～
	主事	柳澤松雄	平成８年４月～平成９年３月
	主事	小西孝典	平成９年４月～平成10年３月

調査一課	課長（部長兼務）	沼田文夫	平成８年４月～
	調査第３班長	海老澤　稔	平成８年４月～平成９年３月
	調査第２班長	中山忠久	平成９年４月～
	主任調査員	茂木悦男	平成８年４月～平成８年６月坂遺跡・船戸内遺跡調査
	主任調査員	宮崎修士	平成８年４月～平成８年６月坂遺跡・船戸内遺跡調査
	主任調査員	吉澤義一	平成９年８月小原遺跡調査
	主任調査員	菱沼良幸	平成９年８月小原遺跡調査
整理課	課長	川井正一	平成10年４月～
	主任調査員	茂木悦男	平成10年11月～平成11年３月整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，凡例を参照されたい。

4　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

5　遺跡の概略

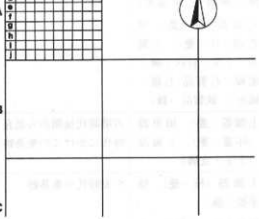
ふりがな	いっぱんけんどういしおかたぶせつちうらせんどうろかいりょうこうじ　ともなう　まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
副書名	坂遺跡・船戸内遺跡・小原遺跡
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第148集
編著者名	茂木　悦男
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL 029（225）6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL 029（225）6587
発行年月日	1999（平成11）年３月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂遺跡	茨城県新治郡霞ヶ浦町大字坂字平2,003番地の１ほか	08461 -72	36度 4分 19秒	140度 22分 34秒	19960401～ 19960630	1,937㎡	一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事に伴う事前調査
船戸内遺跡	茨城県新治郡霞ヶ浦町大字田伏字船戸内3,778番地の１ほか	08461 -130	36度 5分 0秒	140度 22分 56秒	19960401～ 19960630	536㎡	
小原遺跡	茨城県新治郡霞ヶ浦町大字宍倉字小原3,514番地ほか	08461 -1	36度 7分 32秒	140度 18分 50秒	19970801～ 19970831	537㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 1基	弥生土器	古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落跡
		古墳時代	竪穴住居跡 2軒	土師器（坏・甕），須恵器（坏・坏蓋・甕），土製品（土玉・管状土錘）	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 2軒 土坑 1基	土師器（坏・甕），須恵器（坏・坏蓋・甕），土製品（土玉・管状土錘），銅製品（帯金具）	
		時期不明	溝 3条 土坑 26基	土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕），土製品（土玉・管状土錘・埴輪），石製品（石鏃・砥石），鉄製品（鎌）	
船戸内遺跡	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 2軒	土師器（甕），須恵器（坏蓋・甕），土製品（土玉・支脚）	古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡
小原遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 1軒	土師器（椀・甕），須恵器（甑）	平安時代の集落跡
		時期不明	土坑 4基	縄文土器，土製品（土玉），石製品（磨石）	

凡　　例

1　遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，坂遺跡はX軸＝＋8,320m，Y軸＝＋48,760m，船戸内遺跡はX軸＝＋9,416m，Y軸＝＋49,440m，小原遺跡はX軸＝＋14,240m，Y軸＝＋43,200mの交点を基準点（A1a$_1$）とした。大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，4m四方の小調査区を設定した。



第1図　調査区呼称方法概念図

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C……，西から東へ1，2，3……とし，その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに，小調査区も同様に北から南へa，b，c……j，西から東へ1，2，3……0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a$_1$区」，「B2b$_2$区」のように呼称した。（第1図）

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－SI　土坑－SK　溝－SD

遺物　土器－P　拓本土器－TP　土製品－DP　石製品－Q　金属製品－M

土層　撹乱－K

3　遺構及び遺物の実測図中の表示

= 竈　= 焼土・赤彩　= 黒色処理　= 繊維（断面）　= 粘土

●＝土器　○＝土製品　□＝石製品　△＝金属製品　—·—·—＝硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，以下のとおりである。

(1)　遺跡全体図は坂遺跡と小原遺跡が縮尺400分の1，船戸内遺跡が縮尺200分の1とし，各遺構の実測図は，60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺のスケールをつけて表示した。

(3)　「主軸方向」は，炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E　N－10°－W）。

(4)　遺構の規模や遺物の計測値について，現存値は（　）で，推定値は〔　〕を付して示した。

(5)　遺物の計測値は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台（脚）径　E－高台（脚）高　F－つまみ径　G－つまみ高とし，単位はcmである。

(6)　遺物観察表の備考の欄は，実測（P）番号，土器の現存率，出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目　　次

序
例　言
凡　例
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　坂　遺　跡 …… 9
　第1節　遺跡の概要 …… 9
　第2節　基本層序 …… 9
　第3節　遺構と遺物 …… 10
　　1　竪穴住居跡 …… 10
　　2　溝 …… 24
　　3　土　　坑 …… 28
　　4　遺構外出土遺物 …… 35
　第4節　ま　と　め …… 38
第4章　船戸内遺跡 …… 43
　第1節　遺跡の概要 …… 43
　第2節　基本層序 …… 43
　第3節　遺構と遺物 …… 44
　　1　竪穴住居跡 …… 44
　　2　遺構外出土遺物 …… 50
　第4節　ま　と　め …… 51
第5章　小原遺跡 …… 55
　第1節　遺跡の概要 …… 55
　第2節　遺構と遺物 …… 55
　　1　竪穴住居跡 …… 55
　　2　土　　坑 …… 58
　　3　遺構外出土遺物 …… 62
　第3節　ま　と　め …… 73

挿 図 目 次

第 1 図　調査区呼称方法概念図
第 2 図　坂・船戸内・小原遺跡周辺遺跡分布図……7

坂遺跡

第 3 図　坂遺跡基本土層図……9
第 4 図　第1号住居跡実測図……11
第 5 図　第1号住居跡出土遺物実測図(1)……12
第 6 図　第1号住居跡出土遺物実測図(2)……13
第 7 図　第2号住居跡実測図(1)……15
第 8 図　第2号住居跡実測図(2)……16
第 9 図　第2号住居跡出土遺物実測図……17
第 10 図　第3号住居跡実測図……18
第 11 図　第3号住居跡出土遺物実測図……18
第 12 図　第4号住居跡実測図……20
第 13 図　第4号住居跡出土遺物実測図(1)……21
第 14 図　第4号住居跡出土遺物実測図(2)……22
第 15 図　第1号溝実測図……24
第 16 図　第1号溝出土遺物実測図(1)……26
第 17 図　第1号溝出土遺物実測図(2)……27
第 18 図　第2号溝実測図……28
第 19 図　第3号溝実測図……28
第 20 図　第7号土坑・出土遺物実測図……29
第 21 図　第8号土坑実測図……29
第 22 図　第10号土坑実測図……30
第 23 図　第11号土坑実測図……30
第 24 図　第12号土坑実測図……30
第 25 図　第13号土坑実測図……31
第 26 図　第14号土坑実測図……31
第 27 図　第15号土坑実測図……31
第 28 図　第17号土坑・出土遺物実測図……32
第 29 図　第19号土坑実測図……33
第 30 図　第20号土坑実測図……33
第 31 図　第21号土坑実測図……33
第 32 図　第27号土坑・出土遺物実測図……34
第 33 図　遺構外出土遺物実測図……36

第 34 図　坂遺跡調査区設定図……40
第 35 図　坂遺跡遺構全体図……41

船戸内遺跡

第 36 図　船戸内遺跡基本土層図……43
第 37 図　第 1 号住居跡実測図……45
第 38 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図……46
第 39 図　第 2 号住居跡実測図……48
第 40 図　第 2 号住居跡出土遺物実測図……49
第 41 図　遺構外出土遺物実測図……50
第 42 図　船戸内遺跡調査区設定図……52
第 43 図　船戸内遺跡遺構全体図……53

小原遺跡

第 44 図　第 1 号住居跡実測図……56
第 45 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図……57
第 46 図　第 1 号土坑実測図……58
第 47 図　第 1 号土坑出土遺物実測図……59
第 48 図　第 2 ・ 3 号土坑実測図……61
第 49 図　第 4 号土坑・出土遺物実測図……62
第 50 図　1 区遺構外出土遺物実測図(1)……63
第 51 図　1 区遺構外出土遺物実測図(2)……64
第 52 図　1 区遺構外出土遺物実測図(3)……65
第 53 図　1 区遺構外出土遺物実測図(4)……66
第 54 図　1 区遺構外出土遺物実測図(5)……67
第 55 図　2 区遺構外出土遺物実測図(1)……69
第 56 図　2 区遺構外出土遺物実測図(2)……70
第 57 図　3 区遺構外出土遺物実測図……71
第 58 図　5 区遺構外出土遺物実測図……72
第 59 図　6 区遺構外出土遺物実測図……72
第 60 図　小原遺跡調査区設定図……74
第 61 図　小原遺跡遺構全体図……75・76

表　目　次

表1　坂・船戸内・小原遺跡周辺遺跡一覧表……6

坂遺跡

表2　坂遺跡住居跡一覧表……24

表3　坂遺跡溝一覧表……28

表4　坂遺跡土坑一覧表……35

船戸内遺跡

表5　船戸内遺跡住居跡一覧表……49

小原遺跡

表6　小原遺跡土坑一覧表……62

写真図版目次

坂遺跡

ＰＬ１　坂遺跡遠景，Ｃ区完掘状況

ＰＬ２　Ａ・Ｂ・Ｃ区遺構確認状況，Ａ区完掘状況，第１・２号住居跡，第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡竈

ＰＬ３　第２・３号住居跡遺物出土状況，第２・３号住居跡竈，第４号住居跡，第４号住居跡遺物出土状況

ＰＬ４　第１号溝，第１号溝遺物出土状況，第３号溝，第７・８号土坑，第８号土坑遺物出土状況，第10号土坑

ＰＬ５　第11～15号土坑，第17号土坑遺物出土状況，第19・20号土坑

ＰＬ６　第１～４号住居跡出土遺物

ＰＬ７　第４号住居跡出土遺物，第１号溝出土遺物，第17号土坑出土遺物

ＰＬ８　第１・２・４号住居跡・第１号溝・Ａ・Ｃ区遺構外出土遺物

船戸内遺跡

ＰＬ９　船戸内遺跡遠景，第２号住居跡

ＰＬ10　第１号住居跡，第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡竈，第２号住居跡，第２号住居跡竈Ａ・Ｂ

ＰＬ11　第１・２号住居跡・遺構外出土遺物

小原遺跡

ＰＬ12　第１号住居跡，第１号住居跡竈，第１号土坑，第１号土坑遺物出土状況，１区南部・北部遺構確認状況，１区遺構外遺物出土状況

ＰＬ13　２区南部・３～６区遺構確認状況，２区遺構外遺物出土状況

ＰＬ14　第１号土坑・１・２区遺構外出土遺物（縄文土器）

ＰＬ15　第１号土坑・１・２区遺構外出土遺物（土製品，石製品）

ＰＬ16　第１・４号土坑・１～３・５区遺構外出土遺物（縄文土器）

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

一般県道石岡田伏土浦線は，石岡市から霞ヶ浦町を通って，土浦市に至る道路であるが，沿線地域の発展は交通量の増加を招き，茨城県はその解消と交通安全の確保を目的として道路の改良工事を計画した。

平成4年8月31日，出島村教育委員会から茨城県土浦土木事務所あてに，一般県道石岡田伏土浦線道路改良工事予定地内の埋蔵文化財の有無について，現地踏査の結果，周知の遺跡に近接する地域があり，事前の確認調査が必要である旨の回答があった。平成6年2月28日，出島村教育委員会から茨城県教育委員会あてに，一般県道石岡田伏土浦線道路改良事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて依頼（連絡）があり，平成6年4月10日，茨城県教育委員会は，現地踏査を実施した。

平成6年4月13日，茨城県土浦土木事務所から茨城県教育委員会あてに，一般県道石岡田伏土浦線新治郡出島村田伏～坂地内の道路改良事業に伴う埋蔵文化財の所在について照会があった。これをうけ，平成6年12月5日，茨城県教育委員会は，試掘調査を実施した。平成7年12月27日，茨城県教育委員会は茨城県土浦土木事務所あてに，一般県道石岡田伏土浦線新治郡出島村田伏～坂地内の道路改良事業予定地内に「坂遺跡」「船戸内遺跡」が所在する旨回答した。

平成8年3月4日，茨城県土木部から茨城県教育委員会あてに，「坂遺跡」「船戸内遺跡」の取り扱いについて協議があった。平成8年3月11日，文化財保護の立場から協議を重ねた結果，茨城県教育委員会は茨城県土木部あてに，「坂遺跡」「船戸内遺跡」の取り扱いについて，記録保存の措置を講ずることとし，埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成8年7月12日，茨城県土浦土木事務所から出島村教育委員会あてに，一般県道石岡田伏土浦線新治郡出島村宍倉地内の道路改良事業に伴う埋蔵文化財の所在について照会があった。平成8年7月23日，出島村教育委員会から茨城県教育委員会あてに，一般県道石岡田伏土浦線新治郡出島村宍倉地内の道路改良事業に伴う埋蔵文化財の所在について，茨城県土浦土木事務所からの照会の進達があった。

平成8年11月18日，茨城県教育委員会は茨城県土浦土木事務所あてに，一般県道石岡田伏土浦線新治郡出島村宍倉地内の道路改良事業予定地内に「小原遺跡」が所在する旨回答した。

平成9年2月20日，茨城県土木部から茨城県教育委員会あてに，「小原遺跡」の取り扱いについて協議があった。平成9年3月17日，文化財保護の立場から協議を重ねた結果，茨城県教育委員会は茨城県土木部あてに，「小原遺跡」の取り扱いについて，記録保存の措置を講ずることとし，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

なお，平成9年4月1日，町制施行により出島村は霞ヶ浦町となった。

第2節　調査経過

坂遺跡，船戸内遺跡の発掘調査は，平成8年4月1日から平成8年6月30日までの3か月間，小原遺跡の調査は平成9年8月の1か月間で実施した。以下，調査経過についてその概要を記述する。

《坂遺跡・船戸内遺跡》平成8年

4月上旬　12日までに発掘調査のための事務所，倉庫等を設置する。

中旬　18日までに調査区内の除草・清掃等を終了し，坂遺跡A区から順にB・C区と試掘調査を実施した。

下旬　22日までに坂遺跡A・B・C区の試掘を終了し，坂遺跡A・C区については重機による表土除去を開始し，並行して遺構確認作業を実施した。坂遺跡B区は試掘の結果，旧地形が台地の斜面部で，現在は建設資材の置き場となっているため，撹乱や盛り土があった。土師器片や須恵器片は採集されたものの，遺構が検出されなかったため，表土除去は実施せず，調査も終了することにした。船戸内遺跡は，25・26日の2日間で試掘調査を実施した。船戸内遺跡は，細長く伸びた舌状台地の先端部にあり，重機による表土除去は不可能なため，坂遺跡の表土除去と並行して，人力による表土除去を実施することにした。

5月上旬　船戸内遺跡は7日までに表土除去を終了し，遺構確認の結果，竪穴住居跡2軒を検出した。坂遺跡A・C区は，重機による表土除去と遺構確認を9日までに終了し，溝3条，土坑26基を検出し，坂遺跡C区からは，竪穴住居跡4軒を検出した。

中旬　坂A遺跡は，10日から溝と土坑を並行して掘り込みを開始した。遺跡南西部からは，縄文時代の陥し穴らしい土坑が6基検出された。24日，第1号溝の覆土中から埴輪片が集中して出土した。

下旬　29日，第17号土坑から弥生土器の広口壺が出土した。

6月上旬　坂A遺跡の調査と並行して，3日から坂遺跡C区の掘り込みを開始した。坂遺跡A区の調査は10日までに終了し，A区全体の完掘写真撮影を行った。坂遺跡C区からは竪穴住居跡が4軒検出されたが，いずれも覆土が浅く，おそらく畑の耕作時に削平されたものと思われる。竈も天井部が残っているものはなかった。7日，第1号住居跡から青銅製の帯金具が出土した。

中旬　竪穴住居跡は覆土が浅いため，床面に注意しながら慎重に掘り込みを進めた。10日，第2号住居跡の床面から焼土が多量に検出され，焼失家屋の可能性が考えられた。12日，第4号住居跡のP4内から土師器の甕片が多量に出土した。坂遺跡A区については，20日までに安全対策をし，すべての調査を終了した。

下旬　20日，船戸内遺跡の竪穴住居跡の掘り込みを開始した。船戸内遺跡は，台地の頂上部にあり，発掘器材の運搬等に時間がかかった。また，船戸内遺跡の所在する台地の地層は，灰色の砂混じりの粘土層で，遺構確認が難しい面もあった。遺物は土師器片，須恵器片が出土している。28日，坂遺跡・船戸内遺跡の航空写真撮影を行った。航空写真撮影後，安全対策をし，すべての調査を終了した。

《小原遺跡》平成9年

8月上旬　1日，現場事務所の設置，リース物品等の搬入を行い調査のための準備をした。4日から補助員を投入し，遺跡内の除草と遺物の表面採集を行った。遺跡は，県道の両側に沿って細長く存在するため，遺構全体を検出するのは難しいと思われた。遺跡は，便宜上1区から6区に分けた。5日，南側の1・2区は小型の重機で，北側の5・6区は人力による表土除去を開始した。表土除去と並行して遺構確認作業を行った。

中旬　引き続き，表土除去及び遺構確認作業を行った。2区の中央部から平安時代のものと思われる竪穴住居跡（第1号住居跡）を検出し，竈も一部ではあるが確認した。また，1区中央部の第1号土坑からは縄文土器片が出土した。

下旬　引き続き掘り込み及び実測を行い，28日までに終了し，安全対策として埋め戻しをし，すべての調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

坂遺跡は，茨城県新治郡霞ヶ浦町大字坂字平2,003番地の1ほかに，船戸内遺跡は，新治郡霞ヶ浦町大字田伏字船戸内3,778番地の1ほかに，小原遺跡は，新治郡霞ヶ浦町大字宍倉字小原3,514番地ほかにそれぞれ所在し，坂遺跡・船戸内遺跡は霞ヶ浦町役場から東に約5km，小原遺跡は北に約4.5kmのところに位置している。

遺跡が所在する霞ヶ浦町は，茨城県の中央部からやや南寄りに位置し，霞ヶ浦に突出した半島上にある。北は石岡市と，西は土浦市と接している。当町は，平成9年4月1日，町制施行により出島村から現在の霞ヶ浦町となった。当町の総面積は約71㎢で，東西約12km，南北約8kmの東西に長い町域である。

霞ヶ浦町の地形は，常総平野特有の台地と東・南部に展開する霞ヶ浦周辺の低地から成っている。台地は，筑波山塊の東方に広がる新治台地で，関東平野の東部に広がる常総台地の一部で，関東ローム層で覆われ，標高は25～27mである。この台地は東流して霞ヶ浦に注ぐ菱木川と一ノ瀬川によって，さらに三条の細長い台地に分けられる。低地は，沖積低地で，霞ヶ浦の湖岸と菱木川の本支流域，一ノ瀬川の本支流域にそれぞれの河川の開析によって形成されている。湖岸低地は，台地の形に従って比較的単調に縁どっているが，菱木川，一ノ瀬川の流域には各所に谷(谷津)があり，台地と複雑に入り組んで樹枝状地形を形づくっている。低地は，ほとんどが水田に利用されている。

地質は，低地をつくっている沖積層と台地をつくっている洪積層とから構成されている。洪積層は下位より鉾田層・成田層・竜ヶ崎砂礫層・常総粘土層・関東ローム層に分けられる。鉾田層は，礫まじりの砂および貝殻まじりの砂質シルトまたはシルトが主体をなしている。成田層は鉾田層に不整合に重なり，台地全体に分布し，主に中粒砂からなる下部層と青灰色から黄白色と変化し，シルトを含む上部層とに分けられる。竜ヶ崎砂礫層は，成田層に一部整合，一部不整合に重なる砂礫層である。層相は，主として灰色のクロスラミナのいちじるしい細礫まじりの中粒～粗粒の砂からなり，径10cm程のシルト礫を含むところもある。また，東方にいくにしたがい，次第に礫が少なく，砂の粒度も小さくなる傾向をもっている。常総粘土層は，竜ヶ崎層に整合に重なり，灰色～灰白色の凝灰質の粘土層である。分布が局部的で田伏・柏崎にみられ，厚さは約1mである。関東ローム層は，褐色のローム層で，下半分のややチョコレート色のロームと上半分の褐色ロームに二分される。そして下半分は武蔵野ロームに，上半分は立川ロームに相当するものと考えられる。

坂遺跡・船戸内遺跡は，ともに霞ヶ浦町の南東部，霞ヶ浦の西岸の台地上に，小原遺跡は霞ヶ浦町の北部，霞ヶ浦と菱木川に挟まれた台地上に位置している。坂遺跡は，新治台地が霞ヶ浦に突出した舌状台地上にあり，標高21～27mで，南側の低地は水田に利用されている。水田との比高は約25mである。調査前の現況は山林及び荒地であった。船戸内遺跡は，坂遺跡から北東方向に約1.5kmのところにあり，坂遺跡同様，新治台地が霞ヶ浦に細長く突出した舌状台地上にあり，標高23～24mで，東側は水田，西側は霞ヶ浦からのびた小支谷で荒地（湿地）である。調査前の現況は山林である。小原遺跡は，坂遺跡から北西方向に約8kmのところにあり，霞ヶ浦と菱木川に挟まれた，新治台地から伸びる細長い台地上にあり，標高25～26mで，北側及び南側は水田に利用されている。水田との比高は約25mである。調査前の現況は畑地である。

参考文献
・大森昌衛・蜂須紀夫『茨城の地質をめぐって』1987年8月
・茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査　玉造』1984年11月
・出島村教育委員会『出島村史（続編）』1978年3月

第２節　歴史的環境

霞ヶ浦沿岸には，原始・古代から多数の遺跡が存在するのは周知のとおりである。霞ヶ浦町域もその例にもれず多数の遺跡が存在し，特に多いのは霞ヶ浦に面した台地の縁辺部と霞ヶ浦に流れ込む菱木川，一ノ瀬川に臨む台地上である。霞ヶ浦という恵まれた水産資源と水上交通路，さらには菱木川，一ノ瀬川の河川や豊富な湧水は古くから人々の生活に絶好の舞台となってきた。ここでは，霞ヶ浦町域と小原遺跡に隣接する石岡市南部を中心に主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は，霞ヶ浦町域では現在のところ発見されていない。石岡市域では，宮平遺跡・十三塚遺跡・正月平遺跡・越場Ｃ遺跡・弾正Ｃ遺跡が確認され，頁岩製の石刃，ナイフ形石器，尖頭器等が出土している[1]。

縄文時代の遺跡は，霞ヶ浦町域・石岡市域とも縄文時代中期から後期にかけてのものが多数存在するが，調査例は少ない。霞ヶ浦町域では，男神遺跡（貝塚）〈５），貝ヶ崎貝塚〈７），八幡貝塚〈９），安食平貝塚〈10），岩坪平貝塚〈11），西方貝塚〈14），田伏中台貝塚〈29），加茂平貝塚〈30〉及び石岡市の東大橋原遺跡，大作台遺跡等がある。貝ヶ崎貝塚は，霞ヶ浦町牛渡上郷集落の南の谷津に面した台地にある貝塚で，昭和33年に発掘調査が行われている。発掘の結果，ハマグリ・カキ・アカニシなど海水貝を主体とする貝塚で，表土の下に80～90cmの混土貝層があり，その中から縄文時代中期・後期に属する土器片が発見された。また地表下約80cmのところから人骨二体が屈葬の状態で出土した。安食平貝塚は，平集落の西にあり，貝殻，土器片の散乱は標高12～25mのところ約５ha の広さに及んでいるが，特に平地の南寄りから南斜面と東斜面に多い。安食平貝塚は古くから知られた貝塚であるが，昭和31年に発掘調査が行われ，ハマグリ・シオフキ・オキシジミを主体とする海水貝の貝塚であり，阿玉台式期，堀之内式期，加曽利Ｂ式期，安行式期に比定される土器が出土し，縄文時代中期から後期に属する貝塚であることが確認された。岩坪平貝塚も古くから知られた貝塚で，昭和38年に発掘された。現在でも多くの貝殻を見ることができる。土器片は，小片のみが散在しているが縄文時代後期の堀之内式期，加曽利Ｂ式期に属するものが大部分と思われる[3]。石岡市域の東大橋原遺跡は，園部川右岸の台地上に位置し，縄文時代中期の住居跡が４軒検出されている。遺物としては，阿玉台式期から加曽利Ｅ式期に比定される土器が出土している[2]。また，石岡市東田中に位置する大作台遺跡では，東大橋原遺跡とほぼ同時期の縄文時代中期の住居跡が検出されている[1]。

弥生時代の遺跡は，霞ヶ浦町域では周知の遺跡も含めて現在のところ37か所確認されている[3]。しかし，調査が行われた遺跡は１遺跡に過ぎず，残りの36か所は大正大学の分布調査により発見されたものである[4]。これらの遺跡の立地は，沖積低地を臨む台地平坦部にあり，およそ三つのグループに分けられる。高浜入り・菱木川流域，一ノ瀬川流域及び加茂地区で，一ノ瀬川流域に多い傾向にある。採集された資料は，破片が多いため，型式を判断するのは困難であるが，櫛描文や施される縄文はすべて付加条を呈している。唯一調査が行われた遺跡は，塚峰遺跡〈44〉である。塚峰遺跡は，一ノ瀬川左岸の独立丘陵上に形成される弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡である。古墳時代前期が主体であるが，弥生土器片も出土しており，後期の年代が与えられるものである[2]。その他，南根本遺跡〈６），男神遺跡（貝塚），八幡貝塚，加茂平貝塚から弥生土器が出土している。石岡市域の弥生時代の集落跡には，外山遺跡や新池台遺跡で確認されている。いずれも後期の集落であるが，外山遺跡では12軒の住居跡が検出されている。住居跡の規模は，一辺が４～６ｍで，平面形はほとんどが隅丸方形を呈している[1]。

古墳時代の遺跡は，霞ヶ浦町域では古墳が中心で，多数その存在が知られている。古墳の発生及び伝播は，

大和朝廷と密接な関係があり，古墳の存在はその地が当時大和朝廷の勢力下にあったことを示すものである。常陸における古墳の築造は四世紀末から五世紀初頭に始まるものと考えられている。しかし，霞ヶ浦町域の古墳は，それよりやや下るものと思われる。霞ヶ浦町域の古墳のほとんどは台地上に営まれ，特に周溝を含めた全長110m以上，後円部径40m で村内最大の規模をもつ前方後円墳の富士見塚古墳[4] は，西に筑波，眼下に霞ヶ浦を見下ろす景勝の地に築造されている。埋葬施設としては前方部から箱式石棺が検出されている。出土遺物は装身具（金銅装歩揺・環珞），玉類（碧玉製管玉・ガラス小玉），武具（直刀・鉄鏃）馬具（鏡板・杏葉・辻金具），円筒埴輪・形象埴輪等が出土している。また，その周辺には数基の円墳が散在している。その他，前方後円墳の主なものとしては風返稲荷山古墳〈47〉，坂稲荷山古墳〈32〉，折越十日塚古墳〈33〉，銚子塚古墳群〈18〉などがあげられ，規模は全長約70m 前後である。帆立貝式古墳には大日山古墳がある。円墳で大規模なものとしては，風返の風返古墳群〈20〉の羽黒山古墳，浅間山古墳，牛塚古墳〈34〉などがあり，円墳群としては，桜山台古墳群〈17〉，野中古墳群などがある。多くの古墳に埋葬された当時の豪族は，豊かな自然環境に恵まれた当地の有力者であったと推察される。古墳時代の住居跡としては，歩崎観音の西方約30m の霞ヶ浦に面した台地上にある，「佐賀の住居址」と呼ばれるものがあり，現在は霞ヶ浦町郷土資料館になっている。住居跡が数軒発見されている。遺物は，土師器が主で，高坏，壺，土錘，石鏃や，須恵器の甑等が出土している。石岡市域では，古墳時代の集落跡として，前期の外山遺跡，後期の鍛鬼塚遺跡・新池台遺跡などが調査されている。新池台遺跡からは，古墳時代後期の住居跡が２軒検出され，焼失家屋と思われる第27号住居跡からは，炭化した木製の櫛の他に，土師器の甕・坏等が出土している。

大化改新によって，常陸国が成立し，国府が今の石岡市におかれた。その下に高，久自，仲，新治，筑波，茨城の６郡が置かれ，のち香島，信太，河内，白壁，行方の５郡が分置されて，11郡170郷となった。霞ヶ浦町は茨城郡に属し，安飾，佐賀，大津の３郷に分かれており，兵部省の南野牧が置かれていたらしい（のち開墾されて南野庄となった）。

奈良・平安時代の遺跡は，霞ヶ浦町域では多数確認されているが，未調査のものがほとんどである。そして生産遺跡が多く，製鉄跡としてかなくそ山遺跡〈52〉，小津製鉄跡〈53〉，兵庫峰製鉄跡〈54〉がある。深谷の八千代台遺跡〈56〉は，平成８年に調査され，９世紀代の住居跡が20軒検出されている。石岡市域南部では，弾正Ｃ遺跡・梶和崎遺跡・山崎遺跡・北垂Ｂ遺跡があるが，いずれも未調査である。

鎌倉時代の常総地方（常陸国と下総国の一部）は小田に小田氏，府中に常陸大掾氏，太田に佐竹氏，結城に結城氏などがあって勢威を振るっていた。ことに常陸国南部においては，常陸総地頭職の大掾氏と常陸守護職小田氏との勢力が盛んで，当地にはこの両氏の勢力が入っていたようである。坂折越の要害館跡〈39〉は大掾氏の家臣要害氏の居館と伝えられており，安食の安食館跡〈40〉には小田氏四代時知の子越中守盛知が地頭として居り，のち盛知の子兵部少輔知房に伝えたと記録に見える。このことは初め当地のほとんどは大掾氏の勢力下にあったが，小田氏が小田城を構えてよりその勢力は次第に拡大して，13世紀後半にはこの地にも及んだことを示すものであろう。

註

(1) 石岡市史編さん委員会『石岡の歴史』 1984年11月

(2) 出島村教育委員会『出島村史』復刻版 1998年８月

(3) 霞ヶ浦町郷土資料館『霞ヶ浦沿岸の弥生文化』 1989年８月

(4) 大正大学考古学研究会『鴨台考古 第４号』1985年３月

(5) 出島村教育委員会『富士見塚古墳群』1992年３月

参考文献

・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会　1990年３月

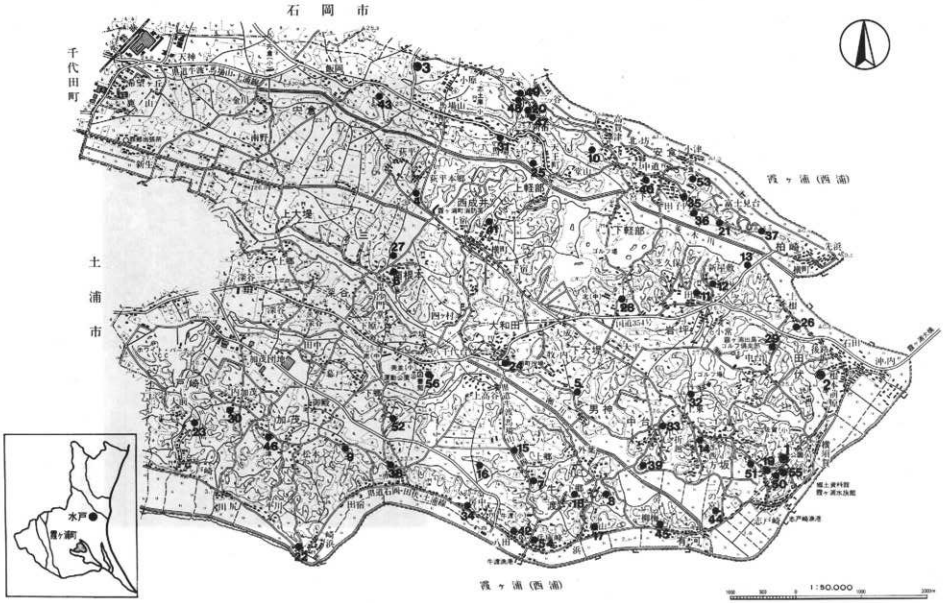
・霞ヶ浦町郷土資料館『霞ヶ浦の首長』1997年８月

・出島村郷土資料館『縄文時代の漁業』1996年８月

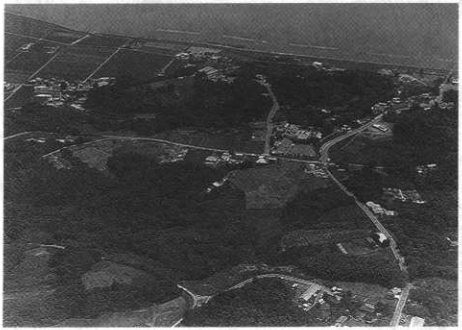
表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
①	坂遺跡（坂A・B・C遺跡）	2850		○	○	○		
		2851						
		2852						
②	船戸内遺跡					○		
③	小原遺跡	1870		○				
4	荻平遺跡	1871		○				
5	男神遺跡（貝塚）	1872		○	○			
6	南根本遺跡	1874		○	○			
7	貝ヶ崎貝塚	1875		○				
8	平三坊貝塚	1876		○				
9	八幡貝塚	1879		○				
10	安食平貝塚	1881		○				
11	岩坪平貝塚	1883		○				
12	岩坪新屋敷貝塚	1884		○				
13	岩坪寄居貝塚	1889		○				
14	西方貝塚	1892		○				
15	八幡古墳	1893				○		
16	水ノ口古墳群	1894				○		
17	根山台古墳群	1900				○		
18	銚子塚古墳群	1903				○		
19	東方古墳群	1908				○		
20	風返大日山古墳	1918				○		
21	野中古墳群	1920				○		
22	崎浜横穴群	1927				○		
23	戸崎城跡	1933						○
24	大和田城跡	1934						○
25	宍倉城跡	2935						○
26	田伏城跡	1936						○
27	南根本古墳群	1939				○		

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
28	下高野貝塚	3454		○				
29	田伏中台貝塚	3455		○				
30	加茂平貝塚	3456		○				
31	馬場平遺跡	3457		○	○			
32	坂稲荷山古墳	3464				○		
33	折越十日山古墳	3465				○		
34	牛塚古墳	3472				○		
35	太子古墳群	3476				○		
36	笹塚古墳群	3481				○		
37	富士見塚古墳群	3482				○		
38	赤塚古墳群	3485				○		
39	要害館跡	3488						○
40	安食館跡	3489						○
41	成井館跡	3490						○
42	八田館跡	3491						○
43	飯岡遺跡	1873				○		
44	塚峰遺跡				○			
45	柳梅台古墳群	1902				○		
46	下大津遺跡				○			
47	風返稲荷山古墳					○		
48	風返浅間山古墳					○		
49	風返羽黒山古墳					○		
50	姥神古墳群	3478				○		
51	羽黒山古墳群	3479				○		
52	かなくそ山遺跡	1885					○	
53	小津製鉄跡	3458					○	
54	兵庫峰製鉄跡	3459					○	
55	天神山古墳	3466				○		
56	八千代台遺跡						○	



第2図　坂・船戸内・小原遺跡周辺遺跡分布図



坂遺跡遠景

第3章 坂　遺　跡

第1節　遺跡の概要

坂遺跡は，霞ヶ浦町の南東部，新治台地が霞ヶ浦に向かって伸びた台地の先端部にあり，東には霞ヶ浦が湖水を湛えている。調査区は，道路に沿って3か所に分かれており，南側からA・B区及びC区と仮称した。面積は合計1,937㎡で調査前の現況は，畑地及び山林であった。この中でB区は，建設資材の置き場となっていたためか，撹乱や盛土があり，遺構は検出されなかった。なお，A区に隣接して，姥神古墳群がある。

今回の調査によって，古墳時代後期から奈良時代のものと思われる竪穴住居跡4軒，縄文時代のものと思われるものも含めて，土坑28基，溝3条が検出された。当遺跡は，古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落跡であることが判明した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）に15箱出土した。遺物の大部分は，古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器や須恵器で，ほとんどが竪穴住居跡の床面から出土している。

第2節　基本層序

調査A区の西部（J1d$_5$）区にテストピットを掘り，基本層序の観察を行った（第3図）。

第1層は，耕作土。厚さ約40㎝で，黒褐色をしている。

第2層は，10～25㎝で，暗褐色をしている。

第3層は，15～20㎝で，褐色をしている。

第4層は，18～20㎝の褐色のローム層で締まりがある。

第5層は，38～43㎝の褐色のローム層で第4層より粘性が強く，締まりもある。

第6層は，24～30㎝の褐色のローム層で，粘性・締まりとも強い。

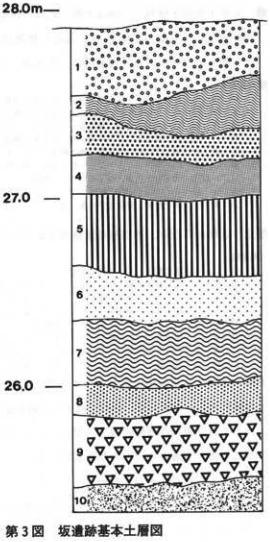
第7層は，30～35㎝の褐色のローム層で，粘性・締まりとも強い。

第8層は，10～19㎝の褐色のローム層で，粘土とハードロームを含み，粘性・締まりとも強い。

第9層は，36～40㎝のにぶい褐色の粘土層で，粘性・締まりとも強い。

第10層は，15～19㎝の褐灰色の砂層で，締まりはあるが粘性は弱い。

遺構は，3層上面で確認し，第4・5層を掘り込んで構築されている。



第3図　坂遺跡基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で，C区から竪穴住居跡4軒が検出されたが，いずれも上部が削平されており，遺存状態はよくなかった。遺物も実測可能なものはできる限り取り上げたが，点数的には少なかった。以下，検出した住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第4図）

位置　調査C区の北部，A8b_7区。

規模と平面形　遺構の東部が調査区域外となっているが，長軸5.25m，短軸(3.35)mで長方形と推定される。

主軸方向　N－8°－E

壁　壁高は50～56cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，踏み固めた部分は見られない。

ピット　4か所（P_1～P_4）。P_1～P_3は，長径46～48cm，短径39～45cmの不整円形，深さ30～38cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。P_3は径34cmの不整円形，深さ20cmで，出入り口施設に伴うピットと思われる。P_4は，長径54cm，短径44cmの不整楕円形で，性格は不明である。

竈　北壁中央部を壁外に70cmほど掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの長さ150cm，最大幅125cmである。火床部は，床面を8cmほど掘りくぼめている。煙道部は，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

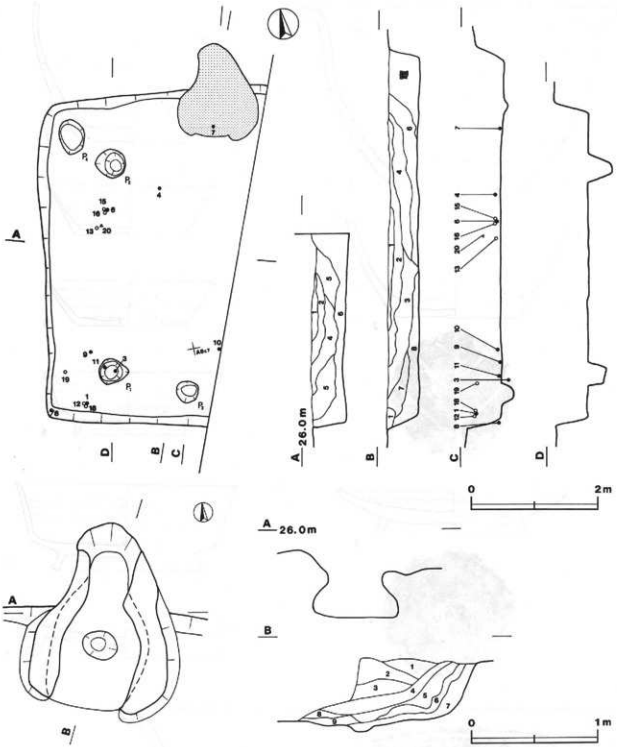
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化材・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土小ブロック多量，焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子微量
6　褐　　色　焼土中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
7　にぶい褐色　焼土粒子少量，焼土中ブロック微量
8　灰　褐　色　ローム粒子中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
9　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック・炭化材・ローム粒子少量

覆土　8層からなり，不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

1　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子微量
2　暗　褐　色　炭化粒子中量，ローム大ブロック・ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化材・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物微量
5　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物微量
6　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物微量
7　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化材・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量

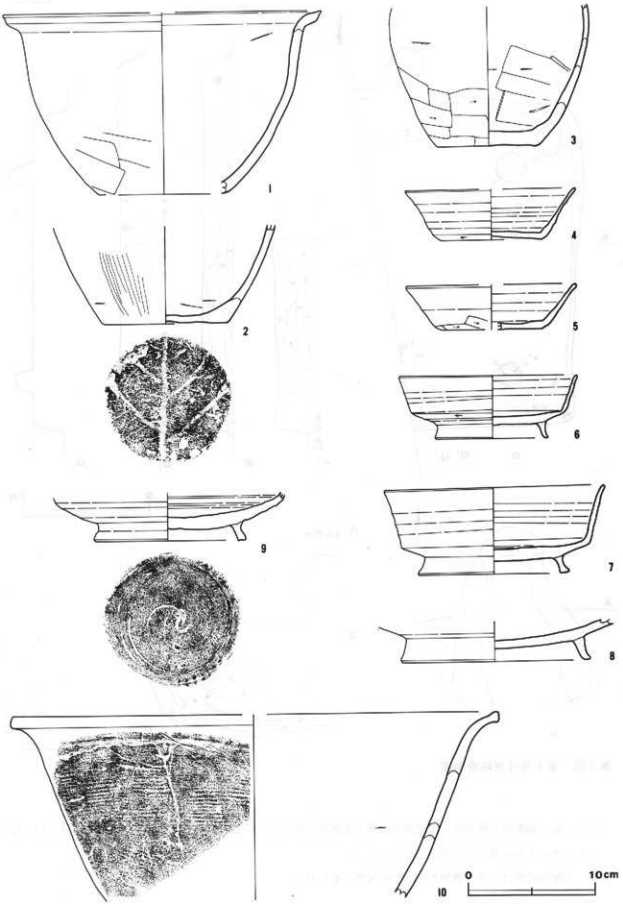
遺物　遺物は，北西部と南西コーナー部の覆土下層を中心に出土している。土師器片484点，須恵器片162点，埴輪片1点，土玉7点，管状土錘1点，銅製品(帯金具)1点が出土している。第5・6図1の土師器甕，12・18の土玉は南西部壁際の覆土上層から，3の土師器甕はP_1の覆土中層から出土している。4の須恵器坏は北部の覆土下層から，6の須恵器高台付坏と15・16の土玉は北西部の覆土下層から，7の須恵器高台付坏は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。8の須恵器盤は南西コーナー部壁際の覆土下層から，9の須恵器盤は南西部の覆土下層から，10の須恵器甕は南部の覆土下層から，11の須恵器甕はP_1付近の覆土下層からそれぞれ出土している。13の土玉は北西部の覆土下層から，19の管状土錘は南西部の覆土上層から出土して



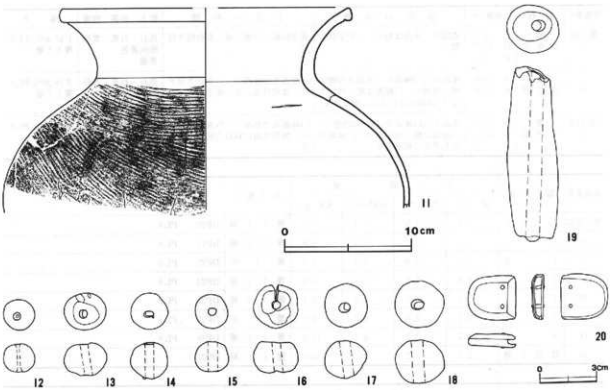
第4図　第1号住居跡実測図

いる。20の銅製品（帯金具）は北西部の覆土中層から出土している。2の土師器甕，5の須恵器坏，14・17の土玉はいずれも覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から8世紀後葉と思われる。



第５図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第6図　第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図 1	甕 土師器	A〔25.0〕 B 14.3 C〔10.2〕	底部から体部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口縁端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 9 20% PL 6 覆土上層
2	甕 土師器	B（7.7） C 9.8	底部から体部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内面ナデ，外面縦方向のヘラ磨き。底部外面に木葉痕。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P 10 30% 覆土中
3	甕 土師器	B〔11.1〕 C 7.9	底部から体部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。体部内面にヘラ当て痕。底部外面に木葉痕。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P 11 60% P_1 覆土中層
4	坏 須恵器	A〔13.4〕 B 4.0 C 8.0	底部から口縁部片。平底。体部は直線的に外傾し，口縁部にいたる。体部内・外面に強いロクロ目。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰黄色 良好	P 12 50% 覆土下層
5	坏 須恵器	A〔13.4〕 B 3.6 C〔8.0〕	底部から口縁部片。平底。体部は直線的に外傾し，口縁部にいたる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部外面一方向の手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P 13 30% 覆土中
6	高台付坏 須恵器	A 15.1 B 5.0 D 9.0 E 1.3	口縁部一部欠損。高台は短く，外反気味に開く。体部は直線的に外傾し，口縁部にいたる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・石英 黄灰色 普通	P 14 85% PL 6 覆土下層
7	高台付坏 須恵器	A 17.5 B 7.0 D 12.0 E 1.4	口縁部一部欠損。高台は短く，外反気味に開く。体部は外反気味に外傾し，口縁部にいたる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	P 15 90% PL 6 竈覆土下層
8	盤 須恵器	B（3.2） D 15.0 E 1.8	底部片。高台はハの字状に開く。	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・石英・雲母 灰白色 良好	P 16 40% PL 6 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図 9	壺 須恵器	B (3.7) D 11.7 E 1.6	底部片。高台は短く，ハの字状に開く。	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・石英・雲母 暗灰黄色 普通	P17 40% PL6 覆土下層
10	甕 須恵器	A (38.6) B (14.6)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に外傾し，口縁部は緩く外反する。口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部外面に平行叩き。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P18 20% PL6 覆土下層
第6図 11	甕 須恵器	A (22.6) B (15.3)	体部から口縁部片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部外面に斜め方向の平行叩き。	長石・石英・雲母 暗灰黄色 普通	P19 40% PL6 覆土下層

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		径 (cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第6図12	土玉	1.8	1.5	0.4	3.2	覆土上層	DP20	PL8
13	土玉	2.3	1.7	0.4	6.8	覆土下層	DP21	PL8
14	土玉	2.0	1.9	0.4	6.4	覆土中	DP22	PL8
15	土玉	1.8	1.6	0.5	4.6	覆土下層	DP23	PL8
16	土玉	2.4	1.7	0.5	8.1	覆土下層	DP24	PL8
17	土玉	2.2	2.0	0.6	9.0	覆土中	DP25	PL8
18	土玉	2.7	2.2	0.7	13.3	覆土上層	DP26	PL8
19	管状土錘	2.7	9.2	0.7	59.0	覆土上層	DP27	

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第6図20	帯金具	2.4	2.5	0.6	8.9	覆土中層	M8

第2号住居跡（第7図）

位置　調査C区の中央部，A8e$_4$区。

重複関係　本跡は，第28号土坑に掘り込まれていることから，第28号土坑よりも古い。

規模と平面形　西部が調査区域外となっているが，長軸7.64m，短軸7.10mの方形と推定される。

主軸方向　N－19°－E

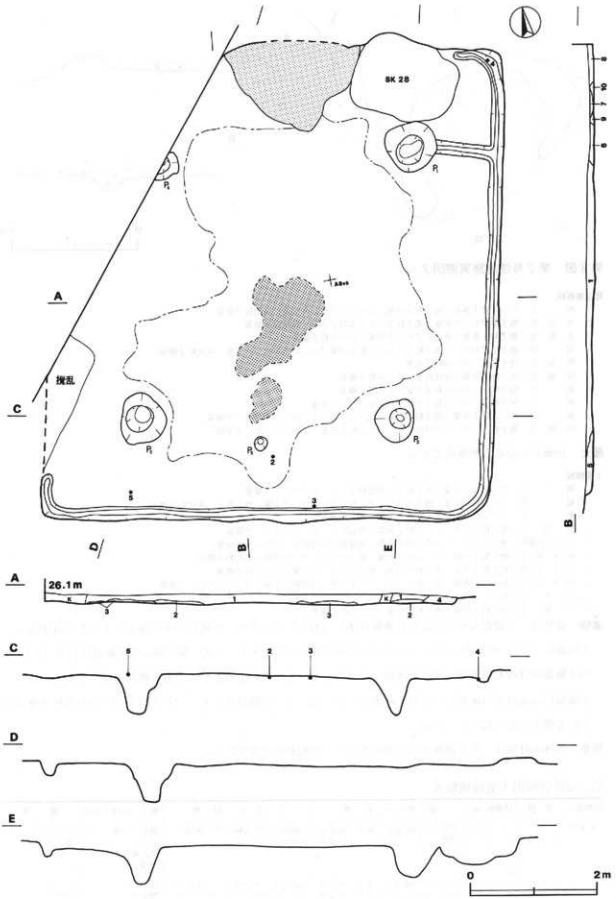
壁　壁高は5～15cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　検出された範囲では，西壁の一部を除いて巡っている。上幅17～25cm，下幅4～10cm，深さ9～19cmで，断面形はU字形である。

床　平坦で，竈前面から中央部にかけて踏み固められている。他に，東壁からP_1に向かって，上幅20cm，下幅6cm，深さ10cm，長さ105cmほどの，断面形がU字形の溝が検出されている。

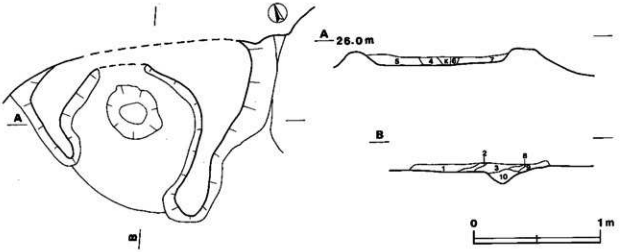
ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は，長径65～80cm，短径63～70cmの不整楕円形，深さ58～60cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。P_5は，長径22cm，短径20cmの不整楕円形，深さ10cmで，出入り口施設に伴うピットと思われる。

竈　北壁中央部に付設されているが，天井部は削平されており，袖部も一部が残存するのみで，煙道部は検出されなかった。規模は，最大長140cm，最大幅215cmと推定される。火床部は，床面を15cmほど掘りくぼめている。



第７図　第２号住居跡実測図(1)

坂遺跡



第8図　第2号住居跡実測図(2)

竈土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子微量
4　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
5　明　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量
6　暗　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子微量
7　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量
9　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
10　暗　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

覆土　10層からなる自然堆積である。

土層解説

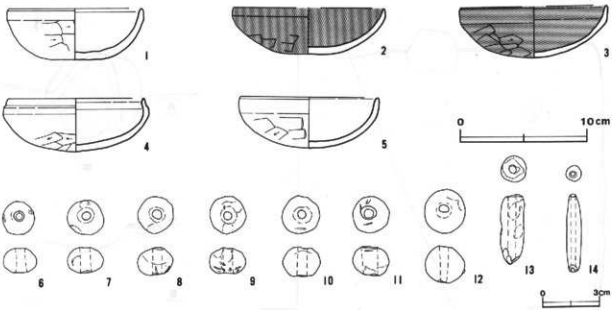
1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子・ローム中ブロック微量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化材・炭化粒子・ローム粒子少量
6　暗　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化材・炭化粒子微量
7　暗　赤　褐　色　粘土粒子多量，焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子微量
8　暗　赤　褐　色　粘土粒子多量，焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
9　明　褐　色　粘土粒子微量
10　黒　褐　色　炭化粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量

遺物　遺物は，土師器片を中心にして遺構全体から出土しているが，小破片が多く図示できるものは少ない。土師器片570点，須恵器片38点，土玉7点，管状土錘2点が出土している。第9図2の土師器坏はP_5付近，3の土師器坏は南部壁際のいずれも床面から出土している。4の土師器坏は北東部壁溝の覆土下層から，5の土師器坏は南西部の床面からそれぞれ出土している。1の土師器坏と6～12の土玉と13・14の管状土錘はいずれも覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から6世紀末から7世紀初めと思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第9図 1	坏 土師器	A 10.5 B 4.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P 20 20% 覆土中
2	坏 土師器	A (11.8) B 3.7	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面上位ナデ，下位ヘラ削り後，ナデ。内・外面黒色処理。	スコリア 褐灰色 普通	P 21 30% 床面



第9図　第2号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 3	坏 土師器	A (11.6) B 4.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境にわずかな稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ナデ。内・外面黒色処理。	長石・スコリア 灰褐色 普通	P22 30% PL6 床面
4	坏 土師器	A 10.6 B 4.2	体部一部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部にいたる。口縁部に段を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P23 80% PL6 覆土下層 体部内・外面に二次火熱痕
5	坏 土師器	A 10.8 B 4.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ナデ。	長石・石英・雲母 明黄褐色 普通	P24 70% 床面

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第9図6	土玉	1.8	1.3	0.6	3.6	覆土中	DP28 PL8
7	土玉	1.9	1.3	0.6	4.6	覆土中	DP29 PL8
8	土玉	1.9	1.5	0.5	5.1	覆土中	DP30 PL8
9	土玉	1.9	1.3	0.5	5.9	覆土中	DP31 PL8
10	土玉	2.0	1.5	0.8	5.1	覆土中	DP32 PL8
11	土玉	2.2	1.9	0.5	5.1	覆土中	DP33 PL8
12	土玉	1.3	3.8	0.4	6.0	覆土中	DP34 PL8
13	管状土錘	1.3	3.8	0.4	6.0	覆土中	DP35
14	管状土錘	0.8	4.1	0.2	2.8	覆土中	DP36 PL8

第3号住居跡（第10図）

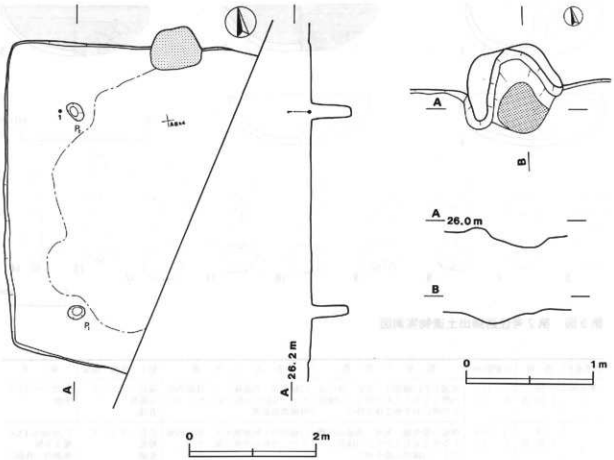
位置　調査C区の南部，A8h_3区。

規模と平面形　東部が調査区域外となっているが，長軸5.10m，短軸(3.86)mで方形と推定される。

主軸方向　N－12°－E

壁　壁高は3～4cmで，外傾して立ち上がる。

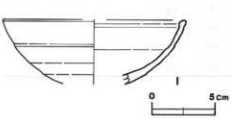
床　平坦で，竈前面から中央部にかけて踏み固められている。



第10図　第3号住居跡実測図

ピット　2か所（P_1・P_2）。P_1・P_2は，長径28～32cm，短径21～23cmの不整楕円形，深さ60～63cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。

竈　北壁中央部を壁外に28cmほど掘り込み，砂混じり粘土で構築されているが，天井部はほとんど削平されており，袖部も一部が残存するのみである。煙道部も検出されなかった。規模は，焚口部から煙道部までの長さ70cm，最大幅80cmである。火床部は，床面を10cmほど掘りくぼめている。なお，上部がほとんど削平されており，土層の観察はできなかった。



第11図　第3号住居跡出土遺物実測図

遺物　本跡は，遺構のほとんどが削平されており，遺物の出土量は少ない。土師器片4点，須恵器片1点が出土している。第13図1の須恵器高坏の坏部は北西部の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から6世紀末から7世紀初めと思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	高坏 須恵器	A（14.6） B（5.1）	坏部片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部にいたる。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石 灰白色 良好	P25 30% 床面 体部内面に自然釉。

第4号住居跡（第12図）

位置　調査C区の南部，A8i₂区。

重複関係　本跡は，第27号土坑に掘り込まれていることから，第27号土坑よりも古い。

規模と平面形　東部が調査区域外となっているが，長軸5.90m，短軸（5.30）m で方形と推定される。

主軸方向　N－54°－W

壁　壁高は7～23cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　検出された範囲では，北東壁の一部を除いて巡っている。上幅14～30cm，下幅2～7cm，深さ6～13cmで，断面はU字形である。

床　平坦で，全体的に軟らかい。

ピット　5か所（P_1～P_5）。P_1～P_4は，長径69～96cm，短径65～84cmの不整楕円形，深さ62～88cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。P_5は，長径52cm，短径47cmの不整楕円形，深さ30cmで，出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　竈右袖部の外側に付設され，長径72cm，短径44cmの不整楕円形で，断面はU字形である。

竈　北西壁中央部からやや南寄りの部分を壁外に42cmほど掘り込み，砂混じりの白色粘土で構築されている。天井部は崩落しているが，両袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの長さ120cm，最大幅115cmである。火床部は，床面とほぼ同じレベルの平坦面を使用している。煙道部は，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　炭化粒子・ローム粒子微量
2　明赤褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
6　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
8　暗赤褐色　焼土中・小ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量，炭化材・炭化粒子微量
9　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
10　灰　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
11　褐　　色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

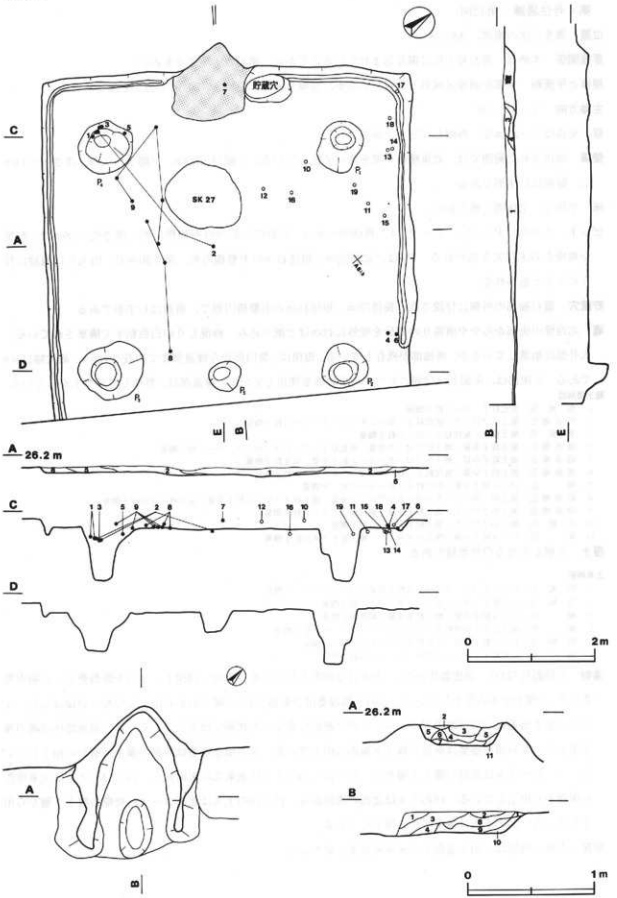
覆土　6層からなる自然堆積である。

土層解説

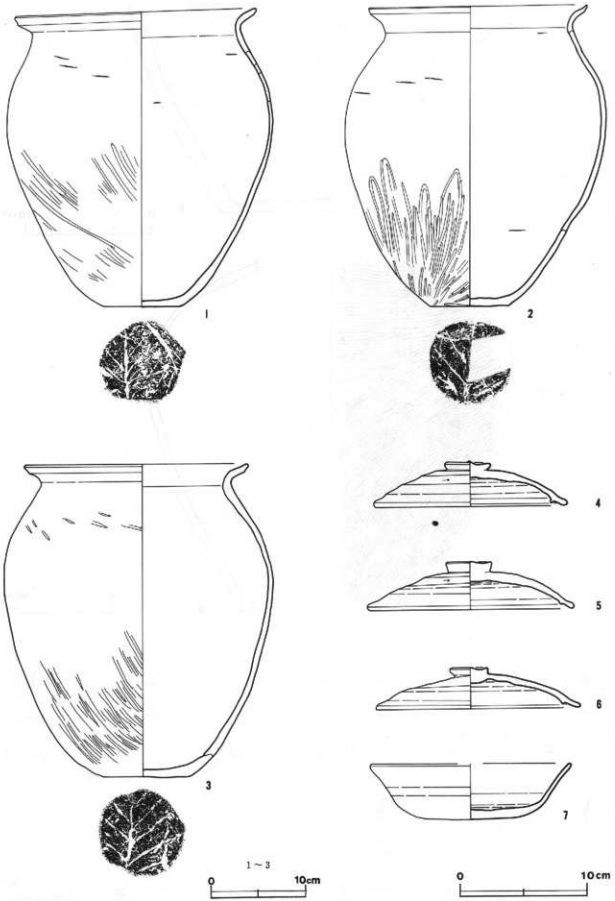
1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2　暗　褐　色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
6　褐　　色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　土師器片614点，須恵器片107点，土玉11点が出土している。第13・14図1・3の土師器甕と5の須恵器壺はP_4の覆土中から出土している。2の土師器甕は中央部とP_4の覆土中から出土したものが接合した。4と6の須恵器壺は北東壁際の床面から，2点が逆位で重なった状態で出土している。7の須恵器坏は竈の覆土中から，8の須恵器甕は南部の覆土下層から出土している。9の須恵器甕は西部の覆土下層から出土している。10・12の土玉は北部の覆土上層から，11・15・19の土玉は北東部の床面から，13・14の土玉は北東壁際の床面から出土している。16の土玉は北部の床面から，17・18の土玉は北部コーナー壁際の覆土下層から出土している。20の土玉は覆土中から出土している。

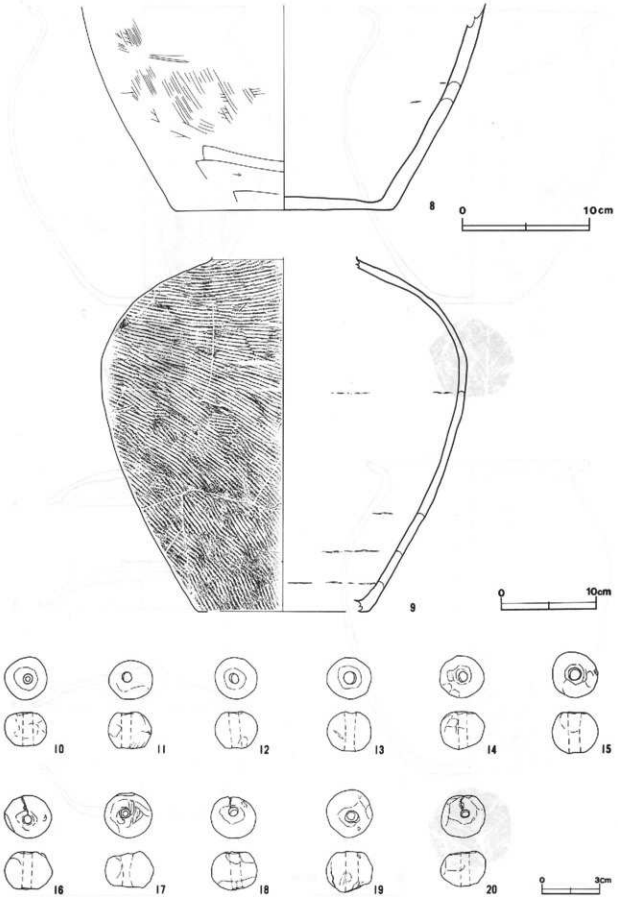
所見　本跡の時期は，出土遺物から8世紀前葉と思われる。



第12図　第４号住居跡実測図



第13図　第４号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図　第４号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	甕 土師器	A 25.4 B 31.3 C 8.0	底部から口縁部片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部は，わずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位ヘラ磨き。外面上位にヘラ当て痕。底部外面木葉痕。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 26 60% PL 7 P_4 覆土中
2	甕 土師器	A 23.0 B 31.7 C 8.3	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部は，わずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位ヘラ磨き。外面上位にヘラ当て痕。底部外面木葉痕。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P 27 70% PL 7 P_4 覆土中
3	甕 土師器	A 23.4 B 33.1 C 9.0	体部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部は，わずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位ヘラ磨き。外面上位にヘラ当て痕。底部外面木葉痕。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P 28 80% PL 7 P_4 覆土中
4	壺 須恵器	A 15.4 B 3.6 F 3.5 G 0.7	口縁部一部欠損。天井部に擬宝珠状のつまみが付く。天井部はドーム状を呈する。口縁部は水平方向に伸び，内側に短いかえりを持つ。	天井部及び口縁部内・外面ロクロナデ。天井部外面上位回転ヘラ削り。	長石・石英 褐灰色 普通	P 29 95% PL 6 床面
5	壺 須恵器	A 16.4 B 3.8 F 3.5 G 0.9	口縁部一部欠損。天井部に擬宝珠状のつまみが付く。天井部はドーム状を呈する。口縁部は水平方向に伸び，内側にごく短いかえりを持つ。	天井部及び口縁部内・外面ロクロナデ。天井部外面上位回転ヘラ削り。	長石・石英 灰白色 普通	P 30 95% PL 6 P_4 覆土中
6	壺 須恵器	A 16.2 B 3.3 F 2.9 G 0.8	口縁部一部欠損。天井部に擬宝珠状のつまみが付く。天井部はドーム状を呈する。口縁部は水平方向に伸び，内側にごく短いかえりを持つ。	天井部及び口縁部内・外面ロクロナデ。天井部外面上位回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 浅黄色 普通	P 31 95% PL 6 床面
7	坏 須恵器	A [15.8] B 4.4 C 7.9	底部から口縁部片。丸みを帯びた平底。体部は外反気味に立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P 32 60% 竈覆土中
第14図 8	壺 須恵器	B (16.2) C 17.2	底部から体部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外面に平行叩き，外面下端手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 明褐灰色 普通	P 33 30% 覆土下層
9	壺 須恵器	B (37.2) C [17.7]	体部片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外面に平行叩き，外面下端手持ちヘラ削り。体部内面に輪積み痕。	長石・雲母 黄灰色 普通	P 34 50% PL 7 覆土下層

図版番号	種別	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第14図10	土玉	2.2	1.8	0.6	8.5	覆土上層	DP37 PL 8
11	土玉	2.2	1.9	0.5	9.6	床面	DP38 PL 8
12	土玉	2.2	1.9	0.5	9.4	覆土上層	DP39 PL 8
13	土玉	2.3	2.1	0.7	10.7	床面	DP40 PL 8
14	土玉	2.3	2.0	0.6	9.6	床面	DP41 PL 8
15	土玉	2.4	2.2	0.7	11.8	床面	DP42 PL 8
16	土玉	2.5	2.0	0.5	10.2	床面	DP43 PL 8
17	土玉	2.6	1.9	0.7	10.9	覆土下層	DP44 PL 8
18	土玉	2.4	2.0	0.5	10.1	覆土下層	DP45 PL 8
19	土玉	2.4	2.1	0.7	11.6	床面	DP46 PL 8
20	土玉	2.3	1.9	0.5	9.6	覆土中	DP47 PL 8

表２　坂遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設					竈	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
							竈跡	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口				
1	$A8b_7$	N－8°－E	(長方形)	5.25×(3.35)	50～56	平坦		2		1	1	1	人為	土師器片48点，須恵器片142点，土玉7点，鉄製品(釣針)1点	
2	$A8e_7$	N－19°－E	(方形)	7.64×7.10	5～15	平坦	一部	4			1	1	自然	土師器片75点，須恵器片30点，土玉1点，管状土錘1点	本跡→SK-28
3	$A8k_8$	N－12°－E	(方形)	5.10×(3.86)	3～4	平坦		2				1	不明	土師器片４点，須恵器片１点	
4	$A8i_8$	N－54°－W	(方形)	5.90×(5.30)	7～23	平坦	一部	4	1		1	1	自然	土師器片514点，須恵器片107点，土玉11点	本跡→SK-27

２　溝

今回の調査で，Ａ区から溝３条が検出された。当遺跡に隣接して姥神古墳群があり，１号溝は古墳の周溝の可能性も考えられたが，調査した範囲では周溝と断定できず，溝として扱うことにした。

第１号溝（遺構全体図・第15図）

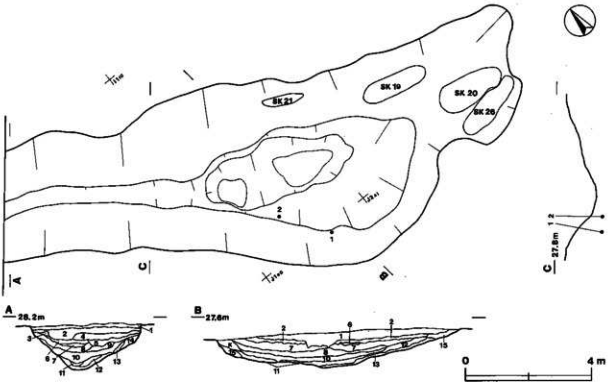
位置　調査Ａ区の北部，$I2j_2$～$I1i_8$区。

重複関係　本跡は，第19・20・21・26号土坑に掘り込まれており，これらの土坑より古い。

規模と形状　西部が調査区域外に延びており，検出された部分は長さ18.6mである。上幅3.60～6.20m，下幅0.50～3.60m，深さ0.94～1.40mで，断面形はＵ字形である。

方向　Ｎ－60°－Ｗ

覆土　15層からなり，ロームブロックやローム粒子を含み，また不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。



第15図　第１号溝実測図

土層解説
1 灰 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2 褐 灰 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
5 暗 褐 色 ローム粒子少量
6 黒 色 ローム粒子少量
7 黒 褐 色 ローム粒子少量
8 黒 色 ローム粒子少量
9 黒 褐 色 ローム粒子微量
10 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック微量
11 灰 褐 色 ローム粒子少量
12 灰 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
13 灰 褐 色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
14 黒 褐 色 ローム粒子微量
15 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片661点，須恵器片20点，土製品11点，石製品3点，鉄製品1点が出土し，この他埴輪片699点が覆土上層から集中して出土している。第16図1・2の土師器坏は覆土下層から，3の手捏土器は覆土中から出土している。4～6の土玉，7～13の管状土錘，14の紡錘車，15・16の円筒埴輪，17・18の石鏃，19の砥石，20の鉄錆はいずれも覆土中から出土している。

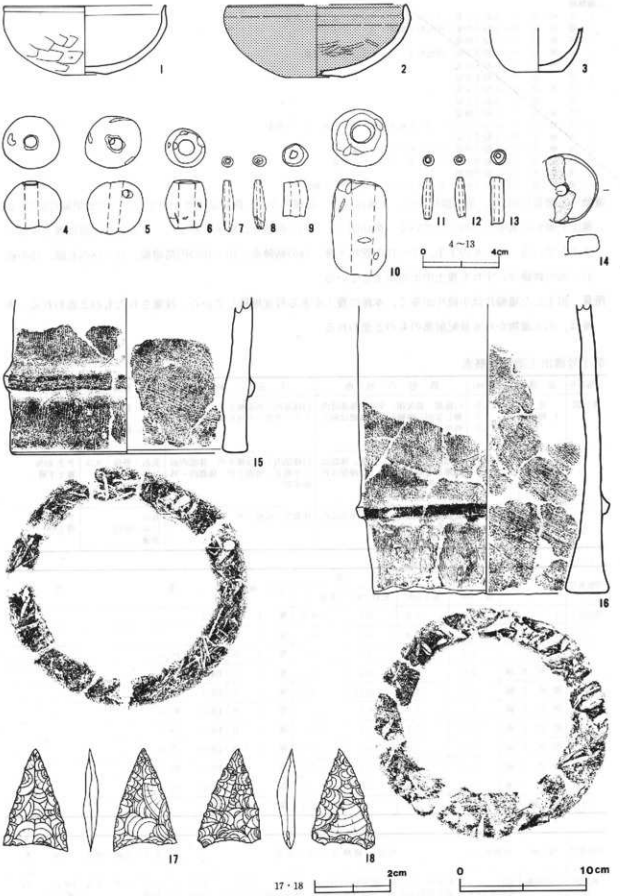
所見 出土した埴輪片は小破片が多く，本跡に覆土がある程度堆積してから，投棄されたものと思われる。本跡は，出土遺物から6世紀前葉のものと思われる。

第1号溝出土遺物観察表

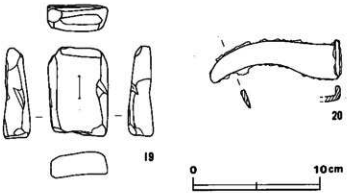
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	坏 土師器	A 13.0 B 5.5 C 3.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら外横し，口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 良好	P 1 95% PL 7 覆土下層
2	坏 土師器	A (14.1) B 5.7 C 4.3	体部から口縁部片。平底。体部は内彎しながら外横し，口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き，外面ナデ。体部内・外面赤彩。	長石・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P 2 45% 覆土下層
3	手捏土器 土師器	B (3.5) C 3.7	底部から体部片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石 にぶい橙色 普通	P 3 80% 覆土中

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第16図 4	土玉	3.0	2.5	0.7	19.6	覆土中	DP 1
5	土玉	3.0	2.8	0.7	19.1	覆土中	DP 2
6	土玉	2.2	2.6	0.8	9.6	覆土中	DP 3 PL 8
7	管状土錘	0.6	2.7	0.2	0.6	覆土中	DP 4 PL 8
8	管状土錘	0.7	2.6	0.15	0.9	覆土中	DP 5 PL 8
9	管状土錘	1.3	2.0	0.5	3.0	覆土中	DP 6 PL 8
10	管状土錘	2.9	5.1	1.3	27.8	覆土中	DP 7 PL 8
11	管状土錘	0.55	2.2	0.2	0.6	覆土中	DP48 PL 8
12	管状土錘	0.6	2.1	0.2	0.6	覆土中	DP49 PL 8
13	管状土錘	0.8	2.5	0.2	1.5	覆土中	DP50 PL 8
14	紡錘車	5.4	1.5	0.8	36.0	覆土中	DP51

図版番号	器種	計測値(cm)	形態・調整技法等の特徴	刷毛目 本/2cm	胎土・色調・焼成	備考
第16図 15	円筒埴輪	器高 (12.3) 基部径 18.6 器厚 1.9	外面タテハケ後，突帯貼り付け。内面ヨコハケ及びナデ。突帯は断面台形。後は比較的鋭い。透孔は残存部なく不明。	外面 10 内面 10	長石・石英・雲母 橙色 普通	DP 8 PL 8 覆土中



第16図　第１号溝実測図(1)



第17図　第１号溝出土遺物実測図(2)

図版番号	器　種	計測値(cm)	形態・調整技法等の特徴	刷毛目本/2cm	胎土・色調・焼成	備　考
第16図16	円鋳城輪	器高 (22.8) 基部径 18.7 器厚　1.3	外面タテハケ後，突帯貼り付け。内面ヨコハケ及びナデ。突帯は断面台形。湯口は残存部なく不明。	外面 13 内面 12	長石・石英・雲母に赤い橙色 普通	DP 9　PL 8 覆土中

図版番号	器　種	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図17	石　錐	2.7	1.6	0.4	1.3	チャート	覆土中	Q 1　PL 8
18	石　鏃	2.6	1.7	0.5	1.6	黒曜石	覆土中	Q 2　PL 8
第17図19	砥　石	7.1	4.8	2.0	84.7	安山岩	覆土中	Q 3　PL 8

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第17図20	鉄　鏃	10.2	2.7	0.4	28.5	覆土中	M 1　PL 8

第２号溝（遺構全体図・第18図）

位置　調査区の中央部，$I1j_8$～$J1d_9$区。

重複関係　本跡は，第16号土坑を掘り込んでおり第16号土坑より新しい。

規模と形状　南東部が調査区域外に延びている。検出された部分は，長さ20.9mである。上幅0.5～1.7m，下幅0.20～0.60m，深さ0.3～0.6mで断面はU字形である。

方向　N－25°－W

覆土　10層からなる自然堆積である。

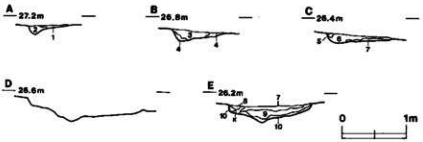
土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　明　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子少量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
9　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
10　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　土師器片41点，不明鉄製品１点が出土しているが，いずれも小破片である。

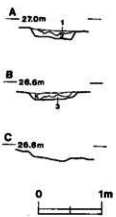
所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期と思われる。

坂遺跡



第18図　第２号溝実測図

第３号溝（遺構全体図・第19図）



位置　調査区の中央部，J1d$_5$～J1c$_5$区。

規模と形状　西部が調査区域外に延びている。検出された部分は，長さ15.5mである。上幅0.5～0.8m，下幅0.3～0.5m，深さ0.08～0.28mで，断面はU字形である。

方向　N－69°－W

覆土　３層からなる自然堆積である。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子少量

第19図　第３号溝実測図

遺物　土師器片２点が，覆土中から出土している。

所見　本跡は出土遺物が少なく，時期を限定するのは難しい。

表３　坂遺跡溝一覧表

溝番号	位置	主軸方向	規模 長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係（古→新）
1	I2j$_7$～I1i$_8$	N－60°－E	(18.6)	3.6～6.2	0.5～3.6	94～140	⌣	平坦	人為	土師器片661点，須恵器片20点，土製品11点，石製品3点，鉄製品１点，縄文片699点	8溝→SK-19-20-21-26
2	I1j$_8$～J1d$_8$	N－25°－E	(20.9)	0.5～1.7	0.2～0.6	30～60	⌣	平坦	自然	土師器片41点，不明鉄製品１点	SK-16→本跡
3	J1d$_5$～J1c$_5$	N－69°－W	(15.5)	0.5～0.8	0.3～0.5	8～28	⌣	平坦	自然	土師器片２点	

３　土　　坑

今回の調査で，土坑28基を検出した。ここでは時期を推定できるもの，遺物が出土しているものについて記述し，それ以外は一覧表で記載する。

第７号土坑（第20図）

位置　調査Ａ区の東部，J1d$_5$区。

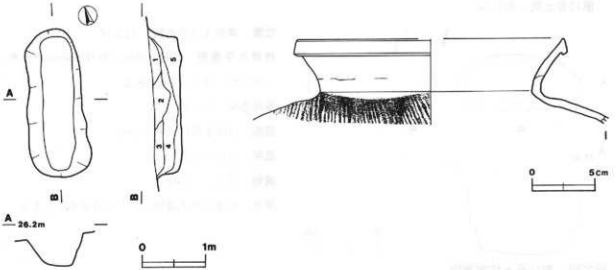
規模と平面形　長径1.36m，短径0.9mの不整楕円形で，深さ48cmである。

長径方向　N－15°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　５層からなる自然堆積である。



第20図　第７号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　にぶい褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　須恵器甕片５点が，覆土中から出土している。第20図１の須恵器甕は覆土中から出土している。

所見　本跡は出土遺物が少なく，時期を限定するのは難しい。

第７号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第20図 1	甕 須恵器	A〔20.9〕 B〔6.8〕	体部から口縁部片，体部は内彎し，口縁部は，強く外反する。口縁部はわずかに折り返されている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面縦方向の平行叩き。	長石・雲母 灰色 普通	P４ 10% 覆土中層

第８号土坑（第21図）

位置　調査Ａ区の東部，J1e₅区。

規模と平面形　長径2.04m，短径0.96mの不整楕円形，深さ17cmである。

長径方向　N－14°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

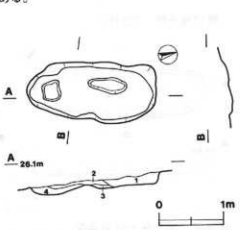
底面　凹凸がある。

覆土　４層からなり，不自然な堆積状況から，人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，粘土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子微量
3　明　褐　色　ローム粒子微量
4　赤　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム・粘土粒子微量

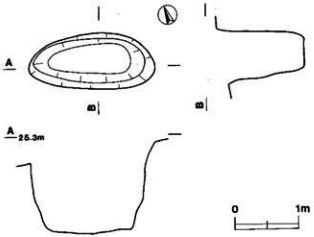
遺物　須恵器片２点が，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，須恵器片から８世紀代のものと思われる。



第21図　第８号土坑実測図

第10号土坑（第22図）



第22図　第10号土坑実測図

位置　調査A区の南部，J1f₁区。

規模と平面形　長径2.00m，短径0.90mの不整楕円形，深さ132cmである。

長径方向　N－69°－W

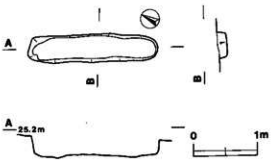
壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第11号土坑（第23図）



第23図　第11号土坑実測図

位置　調査A区の南部，J1f₂区。

規模と平面形　長径2.05m，短径0.45mの不整楕円形，深さ32cmである。

長径方向　N－20°－W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

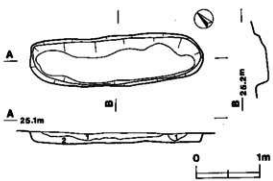
覆土　単一層で自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第12号土坑（第24図）



第24図　第12号土坑実測図

位置　調査A区の南部，J1g₄区。

規模と平面形　長径2.67m，短径0.80mの不整楕円形，深さ20cmである。

長径方向　N－44°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第13号土坑（第25図）

位置　調査A区の南部，J1f$_4$区。

規模と平面形　長径1.65m，短径0.72mの不整楕円形，深さ75cmである。

長径方向　N－29°－W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

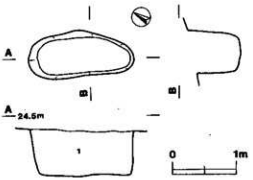
底面　平坦である。

覆土　単一層で自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。



第25図　第13号土坑実測図

第14号土坑（第26図）

位置　調査A区の南部，J1g$_5$区。

規模と平面形　長径2.35m，短径0.71mの不整楕円形，深さ24cmである。

長径方向　N－23°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

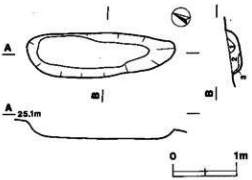
底面　平坦である。

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。



第26図　第14号土坑実測図

第15号土坑（第27図）

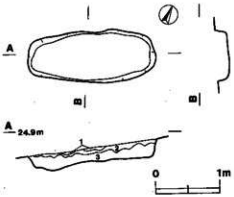
位置　調査A区の南部，J1g$_6$区。

規模と平面形　長径2.05m，短径0.83mの不整楕円形，深さ27cmである。

長径方向　N－60°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。



第27図　第15号土坑実測図

坂遺跡

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・砂粒少量
3　暗　褐　色　ローム粒子微量，粘土粒子・砂粒少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第17号土坑（第28図）

位置　調査A区の北部，I1i₉区。

規模と平面形　長径0.80m，短径0.62mの不整楕円形，深さ12cmである。

長径方向　N－83°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

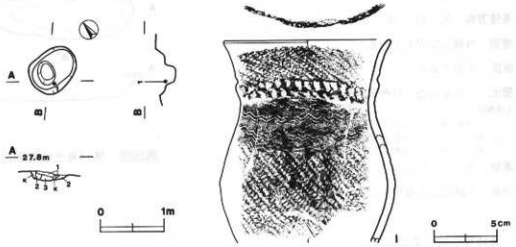
底面　中位に段を持つが，底面は平坦である。

覆土　3層からなり，不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　灰　褐　色　ローム粒子少量

遺物　弥生土器の広口壺1点が出土している。第28図1の弥生土器は，覆土中層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期と思われる。



第28図　第17号土坑出土遺物実測図

第17号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	広口壺 弥生土器	A 13.2 B (16.0)	胴部から口縁部片。胴部は外傾して立ち上がり，頸部から口縁部は外反する。胴部にRLの単節縄文を横回転で施し，頸部には5本隆画による波状文を4段施している。口縁部にはRLの単節縄文を横回転で施し，縄文原体による圧痕が2段に認められる。口唇部にはRLの単節縄文の押圧が施されている。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P5 60% PL7 覆土中層

第19号土坑（第29図）

位置　調査A区の北部，I2j_1区。

重複関係　本跡が第1号溝を掘り込んでおり，第1号溝より新しい。

規模と平面形　長径2.10m，短径0.63mの不整楕円形，深さ55cmである。

長径方向　N－75°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

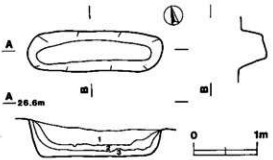
底面　平坦である。

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量，ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　褐　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。



第29図　第19号土坑実測図

第20号土坑（第30図）

位置　調査A区の北部，I2j_2区。

重複関係　本跡が第1号溝を掘り込んでおり，第1号溝より新しい。

規模と平面形　長径2.24m，短径0.86mの不整楕円形，深さ54cmである。

長径方向　N－78°－W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

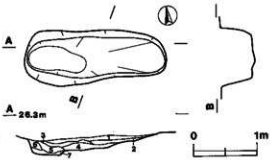
底面　平坦である。

覆土　7層からなり，不自然な堆積状況から，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　灰　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
6　褐　　色　ローム大ブロック少量，ローム粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

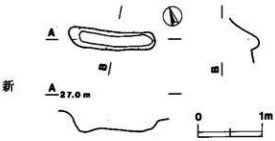


第30図　第20号土坑実測図

第21号土坑（第31図）

位置　調査A区の北部，I1i_6区。

重複関係　本跡が第1号溝を掘り込んでおり，第1号溝より新しい。



第31図　第21号土坑実測図

坂遺跡

規模と平面形　長径1.37m，短径0.29mの不整楕円形，深さ29cmである。

長径方向　N－63°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第27号土坑（第32図）

位置　調査C区の南部，A8 i_2区。

重複関係　本跡が第4号住居跡を掘り込んでおり，第4号住居跡より新しい。

規模と平面形　長径1.21m，短径1.03mの不整楕円形，深さ50cmである。

長径方向　N－47°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凹凸がある。

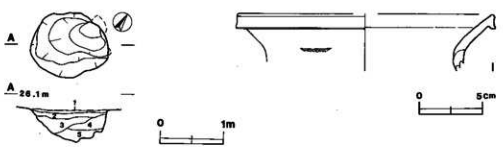
覆土　5層からなり，不自然な堆積状況から，人為堆積と思われる。

土層解説

1　褐　　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量

遺物　土師器片6点，須恵器片1点が出土している。第32図1の，須恵器壺は覆土中から出土している。

所見　本跡は出土遺物が少なく，時期不明である。



第32図　第27号土坑・出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	壺 須恵器	A（20.2） B（4.5）	口縁部片。口縁部は外反し，口縁端部は折り返されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。外面に輪積み痕。	長石・雲母 暗灰黄色 普通	P35 5% 覆土中

表4　坂遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
1	I1h$_8$		円形	0.80 × 0.63	57	外傾	平坦	自然		
2	I2j$_1$		円形	1.37 × 1.20	14	外傾	平坦	自然		
3	J1b$_3$	N−70°−E	楕円形	1.93 × 0.56	38	外傾	平坦	自然		
4	J1d$_7$	N−78°−W	楕円形	2.04 × 0.58	30	外傾	平坦	自然		
5	J1d$_7$	N−83°−E	楕円形	1.10 × 0.84	14	外傾	平坦	自然		
6	J1d$_4$	N−10°−E	楕円形	0.94 × 0.62	20	外傾	平坦	自然		
7	J1d$_5$	N−15°−E	楕円形	1.36 × 0.90	48	外傾	平坦	自然	須恵器片5点	
8	J1e$_2$	N−14°−E	楕円形	2.04 × 0.96	17	外傾	凹凸	人為	須恵器片2点	
9	J1e$_3$	N−41°−W	楕円形	1.52 × 0.64	16	外傾	平坦	自然		
10	J1f$_5$	N−69°−W	楕円形	2.00 × 0.90	132	垂直	平坦	不明		
11	J1f$_5$	N−20°−W	楕円形	2.05 × 0.45	32	垂直	平坦	自然		
12	J1g$_5$	N−44°−W	楕円形	2.67 × 0.80	20	外傾	平坦	自然		
13	J1f$_7$	N−29°−W	楕円形	1.65 × 0.72	75	垂直	平坦	自然		
14	J1g$_7$	N−23°−W	楕円形	2.35 × 0.71	24	外傾	平坦	自然		
15	J1g$_6$	N−60°−E	楕円形	2.05 × 0.83	27	外傾	平坦	自然		
16	J1c$_0$	N−41°−E	楕円形	2.24 × 0.76	60	外傾	平坦	人為		本跡→SD−2
17	I1i$_8$	N−83°−E	楕円形	0.80 × 0.62	12	外傾	平坦	人為	弥生土器片1点	
18	I2j$_1$	N−84°−W	楕円形	(1.68)× 0.94	30	外傾	凹凸	自然		
19	I2j$_1$	N−75°−W	楕円形	2.10 × 0.63	55	外傾	平坦	自然		SD−1→本跡
20	I2j$_1$	N−78°−W	楕円形	2.24 × 0.86	54	垂直	平坦	人為		SD−1→本跡
21	I1i$_8$	N−63°−W	楕円形	1.37 × 0.29	29	外傾	平坦	不明		SD−1→本跡
22	J1b$_4$	N−62°−E	楕円形	2.38 × 1.20	80	垂直	凹凸	自然		
23	J1a$_7$	N−35°−E	楕円形	1.57 × 1.40	101	垂直	平坦	自然		
24	J1b$_7$		円形	0.88 × 0.82	64	外傾	平坦	自然		
25	J1a$_8$		円形	1.58 × 1.40	60	外傾	平坦	自然		
26	J2a$_2$	N−74°−E	楕円形	2.30 × 0.74	36	外傾	平坦	自然		SD−1→本跡
27	A8i$_5$	N−47°−E	楕円形	1.21 × 1.03	50	外傾	凹凸	人為	土師器片6点，須恵器片1点	SI−4→本跡
28	A8d$_4$	N−63°−W	長方形	1.63 × 1.27	40	外傾	平坦	自然		SI−2→本跡

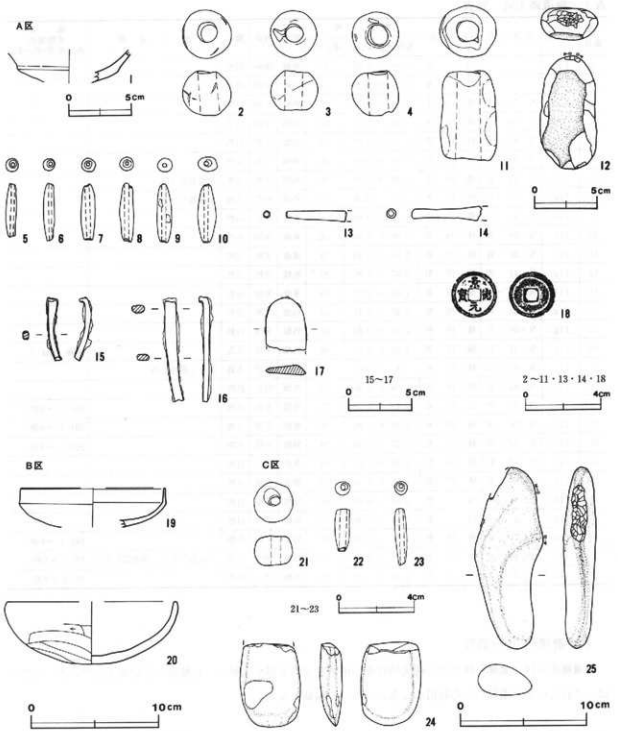
4　遺構外出土遺物

当遺跡からは，遺構に伴わない縄文時代から中世までの土器や土製品，石製品などが出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。

A区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図1	坏 土師器	B（2.6）	体部から口縁部片。体部は内彎気味に外傾する。体部下位に明瞭な稜を持つ。	体部内・外面ナデ。	石英・スコリアにぶい橙色 普通	P6 10% 表採

図版番号	器種	計測値 径(cm)	計測値 長さ(cm)	計測値 孔径(cm)	計測値 重量(g)	出土地点	備考
第33図2	土玉	2.6	2.4	1.0	11.7	表採	DP10
3	土玉	2.0	2.1	0.9	10.8	表採	DP11



第33図　遺構外出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考	
第33図4	土玉	2.5	2.4	1.0	11.4	表採	DP12	
5	管状土錘	0.6	2.8	0.2	1.0	表採	DP13	PL.8
6	管状土錘	0.6	3.0	0.2	1.0	表採	DP14	PL.8
7	管状土錘	0.8	2.9	0.2	1.2	表採	DP15	PL.8
8	管状土錘	0.7	3.1	0.2	1.2	表採	DP16	PL.8

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第33図9	管状土錘	0.8	3.1	0.2	1.4	表採	DP17 PL8
10	管状土錘	1.0	3.1	0.25	1.7	表採	DP18 PL8
11	管状土錘	3.1	4.7	1.4	31.9	表採	DP19 PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
第33図12	敲石	8.9	4.5	2.6	143.7	安山岩	表採	Q4 PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	径(cm)	吸口径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第33図13	煙管	(3.2)	(0.65)	0.35	(0.9)	表採	M2
14	煙管	(3.7)	(0.7)	0.55	(1.6)	表採	M3

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第33図15	釘	(5.0)	0.9	0.5	(6.6)	表採	M4
16	釘	(8.3)	1.0	0.7	(16.8)	表採	M5
17	不明鉄製品	4.2	3.2	0.7	17.3	表採	M6

図版番号	(古銭)銭種	初鋳年 時代	年号(西暦)	出土地点	備考
第33図18	景德元宝	北宋	景德元年(1004)	表採	M7 PL8

B区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図19	坏 土師器	A (11.3) B 3.1	体部から口縁部片。体部は内彎しながら外傾し，口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P7 20% 表採
20	坏 土師器	A (13.2) B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎しながら外傾し，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面ヘラ削り後，ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P8 25% 表採

C区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第33図21	土玉	2.0	1.6	0.5	6.9	表採	DP52 PL8
22	管状土錘	0.8	2.2	0.35	0.9	表採	DP53 PL8
23	管状土錘	0.7	3.0	0.2	1.2	表採	DP54 PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
第33図24	磨製石斧	(6.6)	4.8	1.8	(80.8)	安山岩	表採	Q5
25	敲石	14.3	5.5	2.5	231.3	安山岩	表採	Q6 PL8

第4節 まとめ

今回の調査で，古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡4軒が検出された。ここでは，時代ごとに住居跡や出土遺物について概要を述べまとめとしたい。

縄文時代

遺構は確認されなかったが，中期の加曽利EⅡ式，阿玉台式に比定される土器片が採集されている。石製品では敲石，磨製石斧等が出土している。こうしたことから当時の人々が当遺跡周辺を生活の場として利用していたことが考えられる。また，A区南部の第10～15号土坑が，台地縁辺部に等高線にそって並んでいるのを検出した。深さに差はあるものの，その並び方から，低地の水場にやってくる動物を捕獲するための陥し穴の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

弥生時代

弥生時代の遺物としては，第17号土坑から弥生時代後期のものと思われる広口壺が出土している。この広口壺以外にも，遺構外から弥生土器の小破片が数点出土している。しかし，遺構は検出されず，また当遺跡周辺にも弥生時代の遺跡は確認されていない。

古墳時代（6世紀～7世紀）

本期にあたる住居跡は，調査C区の第2・3号住居跡で，いずれも6世紀末から7世紀初頭の住居跡と考えられる。調査C区は，霞ヶ浦から続く低地に面した台地上にある。調査面積が狭く，またこれらの住居跡は，いずれも上部が削平されており，遺存状態はよくなかった。平面形は方形と推定されるが，規模は第2号住居跡が一辺7.2m前後，第3号住居跡は一辺が5.1m前後とばらつきがある。主軸方向をみると，第2号住居跡がN－19°－E，第3号住居跡がN－12°－Eでいずれも北方向を意識して竈が構築されている。なお第2・3号住居跡の柱穴は規模に違いはあるものの，深さはいずれも60cm前後と深く，掘り込みもしっかりとしたものであった。

出土遺物は，第3号住居跡が極端に少ないが，これは遺構の上部が削平されているためであろう。わずかに土師器の甕・坏，須恵器の坏の破片が出土している。第2号住居跡の出土遺物は，土師器の甕や坏がほとんどであるが，須恵器も少量出土している。この他には，土玉や管状土錘が出土している。

調査A区では，第1号溝の覆土中から6世紀代のものと思われる埴輪片が多量に出土した。当遺跡近辺には絶神古墳群・天神山古墳などの古墳があり，第1号溝は古墳の周溝である可能性も考えられたが，埋葬施設等は確認できず，古墳の周溝とは断定できなかった。

『出島村史』によれば，当遺跡に隣接した場所に「佐賀の住居址」の記述がみえる。これは現在霞ヶ浦町郷土資料館の敷地になっており，その記述によれば25～30cmの深さに掘り込まれた古墳時代後期のものと思われる方形の竪穴住居跡が数軒発見されいる。その際，土師器（坏・高坏・甕・壺・土錘），須恵器（甑），弥生土器等が出土している。この「佐賀の住居址」が，当遺跡の住居跡と直接の関連があるかどうかは不明であるが，地形的にみても，当時霞ヶ浦沿岸の低地に面した台地上に，集落が存在した可能性は高いと考えられる。

奈良時代（8世紀）

本期にあたる住居跡は，第1・4号住居跡で，第1号住居跡は8世紀後葉，第4号住居跡は8世紀前葉のものと考えられる。規模は，両遺構とも一辺が5～6mのもので，平面形は長方形と推定される。主軸方向は，第4号住居跡がN－54°－W，第1号住居跡がN－8°－Eで，新しくなるにつれて真北から東に向きを変えていく。

出土遺物は，土師器・須恵器であるが，古墳時代に比べて須恵器の出土量が増加してくる。当遺跡から出土する須恵器は，胎土に雲母を含み，ほとんどが新治村新治窯群の製品と思われる。器種は，甕・坏・高台付坏・盤・坏蓋等である。蓋は，内側に短いかえりを持つものである。なお第1号住居跡からは，銅製の帯金具（鉈尾）が出土している。

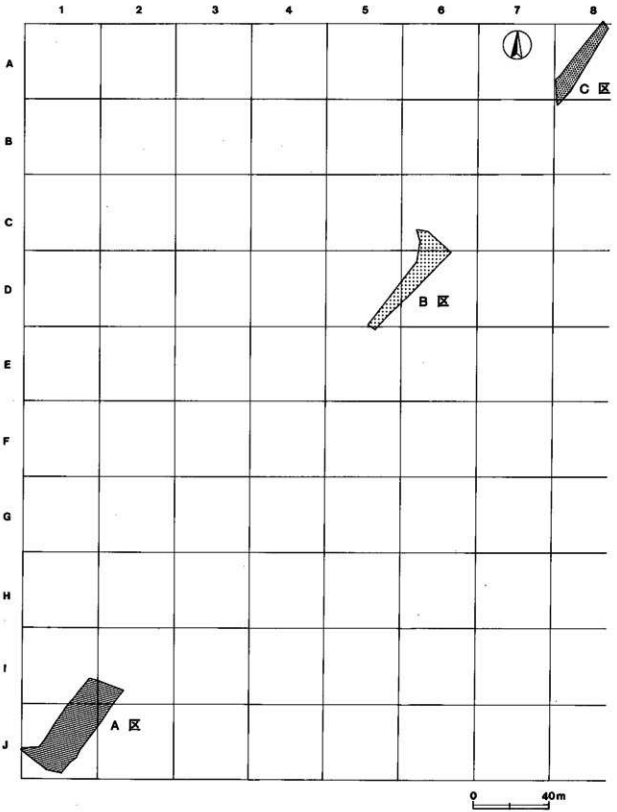
参考文献

・出島村教育委員会『出島村史』復刻版　1998年8月

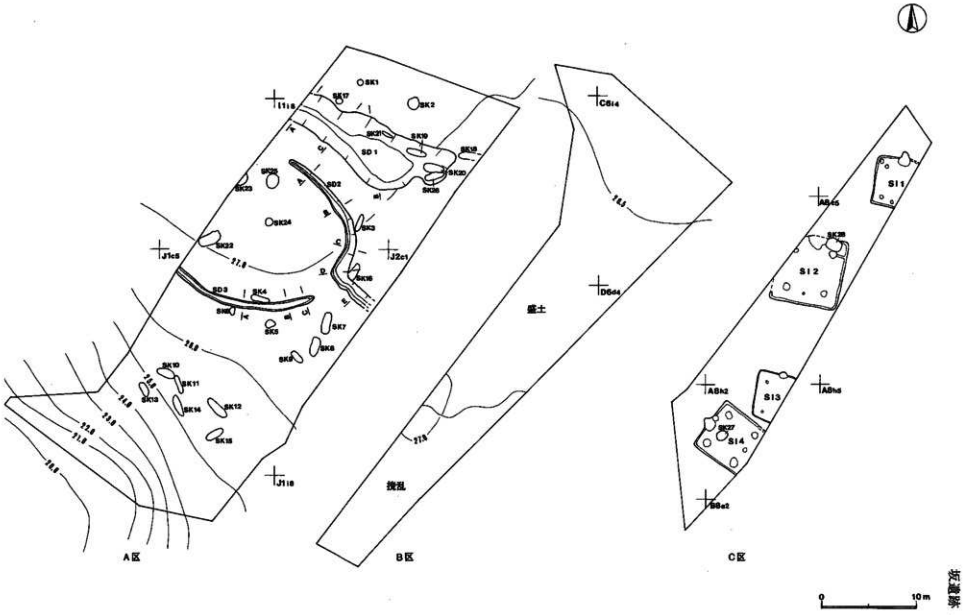
・大正大学考古学研究会『鴨台考古　第4号』　1985年3月

・霞ヶ浦町郷土資料館『霞ヶ浦沿岸の弥生文化』　1998年8月

坂遺跡



第34図　坂遺跡調査区設定図



第35図　坂遺跡遺構全体図

作業風景（坂遺跡）

第4章　船戸内遺跡

第1節　遺跡の概要

船戸内遺跡は，霞ヶ浦町の南東部，新治台地が霞ヶ浦に延びた舌状台地の先端部にある。船戸内遺跡の面積は536㎡で，調査前は山林であった。当遺跡が位置する台地の地質は，全体が粘土混じりの砂層で，遺構確認が難しく，時間を要した。

今回の調査によって，古墳時代後期から奈良時代のものと思われる竪穴住居跡2軒が検出された。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土した。遺物の大部分は，古墳時代後期から奈良時代の土師器や須恵器で，ほとんど竪穴住居跡から出土している。

第2節　基本層序

調査区の南西部（A1f₆区）にテストピットを掘り，基本層序の観察を行った（第36図）。なお本跡は，新治台地から延びた舌状台地の先端部で，遺跡全体が粘土混じりの砂層で，ローム層は検出されなかった。

第1層は，7～20cmで，暗灰黄色の砂層で，粘性は弱い。

第2層は，6～12cmで，明褐色の砂層で，締まりがある。

第3層は，29～40cmで，褐色の砂層で，締まりがある。

第4層は，72～76cmで，褐色の砂層で，粘土のブロックを多量に含み，締まりがある。

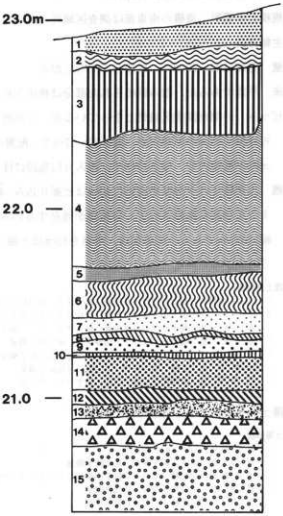
第5層は，2～7cmで，オリーブ褐色の砂層で，砂粒が大きく，締まりがある。

第6層は，20～22cmで，暗灰黄色の砂層で，粘性のある灰色粘土のブロックを含み，締まりがある。

第7層は，7～13cmで，オリーブ褐色の粘土と砂の層で，粘性が強い。

第8層は，2～5cmで，黄灰色の粘土層で，粘性・締まりとも強い。

第9層は，6～9cmで，黄褐色の砂層で，わずかに粘土を含む。



第36図　船戸内遺跡基本土層図

第10層は，1～2cmで，黄灰褐色の砂層で，粘土を含み，粘性・締まりとも強い。

第11層は，16～17cmで，にぶい褐色の砂層で，灰色の粘土を含む。

第12層は，5～9㎝で，オリーブ褐色の砂層で，粘土を含み，粘性は弱い。

第13層は，6～9㎝で，黄灰色の砂層で，締まりはあるが，粘性は弱い。

第14層は，13～15㎝の明褐色の砂層で，粘性・締まりとも強い。

第15層は，33～35㎝の灰色の砂層で，粘性・締まりとも強い。

遺構は，2層上面で確認し，第3・4層を掘り込んで構築されている。

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査では，古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡2軒が検出されたのみで，それ以外の遺構は検出されていない。以下，検出された住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第37図）

位置　調査区の南西部，A1g₂区。

規模と平面形　遺構の南東部は調査区域外となっているが，長軸（4.65)m，短軸4.60mで方形と推定される。

主軸方向　N－35°－E

壁　壁高は30～40㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み固められた部分は検出されなかった。

ピット　一部が調査区域外となっているが，5か所（P_1～P_5）と推定される。P_1～P_4は，長径(32)～56㎝，短径34～45㎝の不整円形，深さ27～37㎝で，配置や規模から主柱穴と思われる。P_5は長径(18)㎝，短径(11)㎝の不整楕円形，深さ17㎝で，出入り口施設に伴うピットと思われる。

竈　北東壁ほぼ中央部を壁外に40㎝ほど掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。天井部は崩落しており，また左袖部も検出されず，右袖部が残存するのみである。規模は，焚口部から煙道部まで長さ100㎝，最大幅(105)㎝である。火床部は，床面を10㎝ほど掘りくぼめている。煙道部は，火床面から直線的に外傾して立ち上がっている。

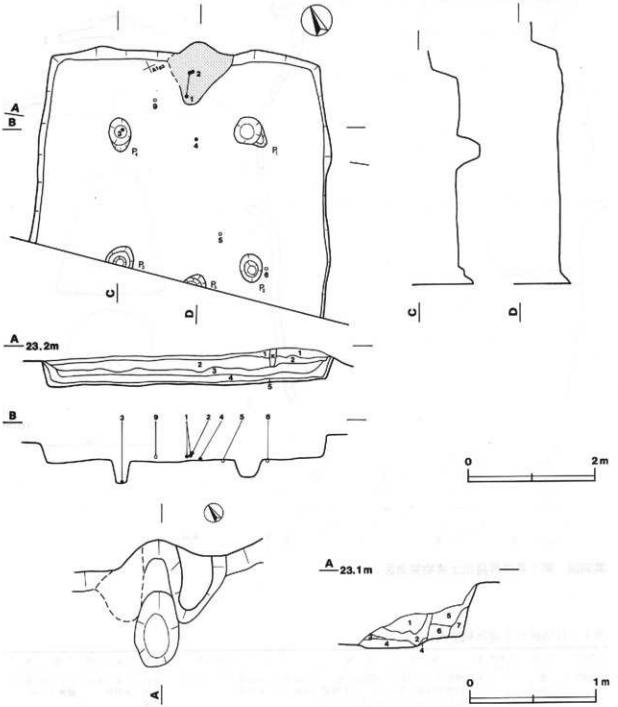
竈土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子少量，山砂少量
2　赤　灰　色　焼土小ブロック少量，炭化粒子少量，粘土ブロック・山砂少量
3　赤　灰　色　焼土小ブロック少量，粘土ブロック・山砂少量
4　赤　灰　色　焼土小ブロック・山砂少量，炭化粒子微量
5　明 褐 灰 色　山砂中量，粘土ブロック少量，炭化粒子微量
6　明 褐 灰 色　山砂・粘土ブロック少量，炭化粒子微量
7　明 褐 灰 色　炭化粒子少量，山砂・粘土ブロック少量

覆土　5層からなる自然堆積である。

土層解説

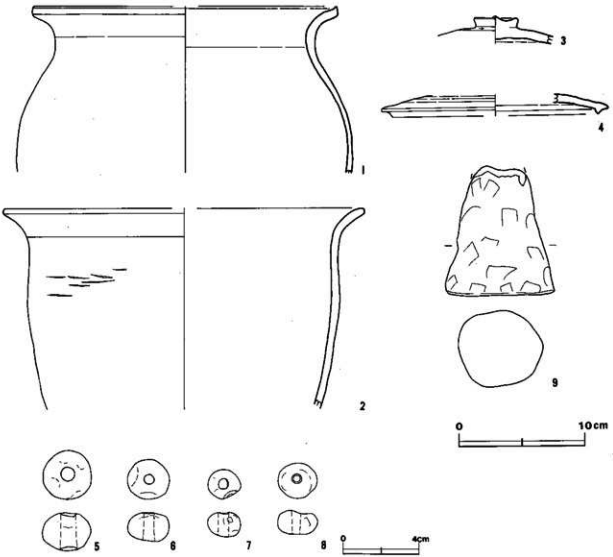
1　灰 黄 褐 色　ローム粒子少量
2　褐　灰　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　灰 黄 褐 色　炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　暗　褐　色　炭化粒子少量，炭化物微量
5　黒　褐　色　炭化粒子・ローム粒子少量



第37図　第１号住居跡実測図

遺物　遺物は土師器片を中心に，竈の周囲から出土している。土師器片834点，須恵器片７点，土玉４点，土製支脚１点が出土している。第38図１・２の土師器甕は竈の覆土下層から，３の須恵器蓋はP_4の覆土中から，４の須恵器蓋と９の土製支脚は竈前面の覆土下層からそれぞれ出土している。５・６の土玉はP_2付近の床面から，７・８の土玉は覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から７世紀末から８世紀前半と思われる。



第38図　第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	甕 土師器	A (24.0) B (13.1)	体部から口縁部片。体部は内彎し。口縁部は緩く外反する。口縁端部はわずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。器面荒れ。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 1 20% PL11 竪穴覆土下層
2	甕 土師器	A (28.4) B (15.8)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に外傾し。口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部外面にヘラ当て痕。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 2 15% PL11 竪穴覆土下層
3	壺 須恵器	B (2.3) F 3.4 G 0.8	天井部片。外面に擬宝珠状のつまみが付く。	天井部及び口縁部内・外面ロクロナデ。天井部外面上位回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P 3 10% PL11 P₁覆土中
4	壺 須恵器	A (18.2) B (1.7)	天井部から口縁部片。口縁部は水平方向にのび，内側に短いかえりを持つ。	天井部及び口縁部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P 4 5% PL11 覆土下層

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第38図5	土玉	2.6	2.0	0.9	10.5	床面	DP1 PL11
6	土玉	2.2	1.5	0.65	6.4	床面	DP2 PL11
7	土玉	1.75	1.3	0.6	2.7	覆土中	DP3 PL11
8	土玉	2.1	1.2	0.5	4.7	覆土中	DP4 PL11

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第38図9	土製支脚	8.7	(16.3)	(518.9)	覆土下層	DP5 PL11

第2号住居跡（第39図）

位置　調査区の北東部，A1c₅区。

規模と平面形　遺跡の北東部が傾斜地で，北東壁は流出し，検出されなかったため，長軸（5.40）m，短軸4.64mで長方形と推定される。

主軸方向　N－34°－W

壁　壁高は8～16cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北東壁が流出しており，検出された範囲では，北西壁の一部を除いて壁溝が巡っている。上幅7～15cm，下幅3～8cm，深さ4～7cmで，断面はU字形である。

床　平坦で，踏み固められた部分は検出されなかった。

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1～P_4は，長径21～34cm，短径20～23cmの不整楕円形，深さ10～29cmで，配置から主柱穴と思われる。P_5～P_6は，長径25～40cm，短径19～24cmの不整楕円形，深さ10～11cmで，性格は不明である。

竈　2基検出されている。竈Aは，北西壁中央部を壁外に50cmほど掘り込み，構築されている。天井部は崩落し，両袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの長さ107cm，最大幅165cmであり，壁外への掘り込みは少ない。火床部は，床面と同じレベルの平坦面を使用している。煙道部は，外傾して立ち上がる。

竈A土層解説

1　赤　色　焼土粒子多量，山砂中量，炭化粒子少量
2　にぶい橙色　山砂多量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　にぶい橙色　山砂多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　灰　赤　色　山砂多量，焼土粒子少量
5　にぶい褐色　山砂中量，焼土粒子微量
6　にぶい橙色　山砂多量，炭化粒子微量

竈Bは，西コーナー部に構築されており，竈A同様に天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は焚口部から煙道部まで長さ60cm，最大幅148cmである。火床部は，床面をわずかに掘りくぼめた程度である。煙道部は，緩やかに外傾して立ち上がる。

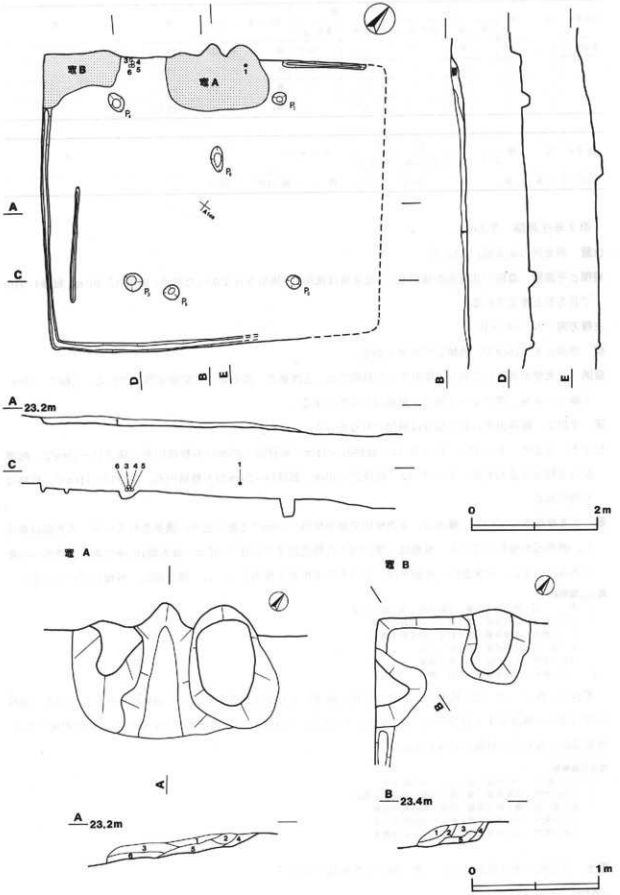
竈B土層解説

1　暗赤褐色　山砂中量，焼土粒子・炭化物少量
2　にぶい橙色　山砂多量，焼土粒子少量・炭化粒子微量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，山砂・粘土粒子少量
4　にぶい褐色　山砂多量，焼土粒子・炭化粒子少量
5　にぶい褐色　山砂中量，炭化粒子・粘土粒子微量

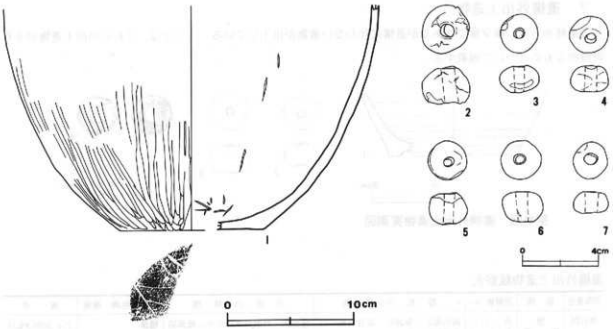
覆土　住居跡の掘り込みは浅く，単一層で自然堆積である。

土層解説

1　にぶい黄褐色　炭化粒子・ローム粒子微量



第39図　第２号住居跡実測図



第40図　第２号住居跡出土遺物実測図

遺物　土師器片101点，須恵器片２点，土玉６点が出土している。第40図１の土師器甕は竈右袖部付近の覆土上層から出土している。２・７の土玉は覆土中から出土している。３～６の土玉は，竈B袖部付近の覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から７世紀後葉のものと思われる。

第２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	甕 土師器	B (17.7) C 11.4	底部から体部片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き。体部内面にヘラ当て痕。底部外面水縦痕。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P５ 20% PL11 覆土上層

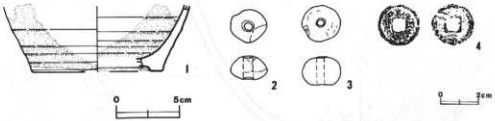
図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第40図 2	土玉	2.5	2.0	0.7	11.1	覆土中	DP６ PL11
3	土玉	2.0	1.4	0.55	5.4	覆土下層	DP７ PL11
4	土玉	2.0	1.4	0.6	5.2	覆土下層	DP８ PL11
5	土玉	2.0	1.7	0.55	6.1	覆土下層	DP９ PL11
6	土玉	2.15	1.6	0.7	6.2	覆土下層	DP10 PL11
7	土玉	1.8	1.2	0.7	3.1	覆土中	DP11 PL11

表５　船戸内遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(m)	床面	内部施設				竈	覆土	出土遺物	備考
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口				
1	A1g₂	N-35°-E	(方形)	(4.65)×4.60	30～40	平坦		4			1	1	自然	土師器片64点，須恵器片７点，土玉６点，土製支脚１点	
2	A1c₁	N-34°-W	(長方形)	(5.40)×4.64	8～16	平坦	一部	4		2		2	自然	土師器片101点，須恵器片２点，土玉６点	

2　遺構外出土遺物

当遺跡からは，極少量ではあるが遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。



第41図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	甕 陶器	B (5.3) D (10.4) E 0.7	高台部から体部片。高台は短くハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。	精良 褐色 良好	P 6 10% PL11 表採

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第41図 2	土玉	1.95	1.3	0.5	3.3	表採	DP12 PL11
3	土玉	2.1	1.5	0.4	5.4	表採	DP13 PL11

図版番号	(古銭) 銭種	初鋳年 時代	年号(西暦)	出土地点	備考
第41図 4	寛永通寶	江戸	寛永13年 (1636)	表採	M 1 PL11

第4節　ま　と　め

今回の調査で，古墳時代後期から奈良時代と思われる竪穴住居跡2軒が検出された。ここでは，当遺跡の位置する地形とこれらの住居跡について概要を述べ，まとめとしたい。

船戸内遺跡の地形と遺構

当遺跡が位置するのは，出島村の東部，霞ヶ浦の西岸で，霞ヶ浦湖岸からは約1kmの台地上にある。この台地は，新治台地から西方向に細長く伸びた標高24m前後の舌状台地である。遺跡の立地する地形は尾根伝いに上って，一段高くなった台地の先端部であり，平坦部はほとんどないといっても過言ではない。

また，この台地を形成する地層は全体が粘土混じりの砂層で，湿り気を帯び，粘性も強い。通常こういった条件の場所に集落をつくることは考えられず，周辺にも集落跡と思われる遺跡は確認されていない。遺物の出土量も少なく，以上のような状況から，当遺跡の住居跡は，ある一定期間，日常の生活以外の目的で構築された可能性が高い。

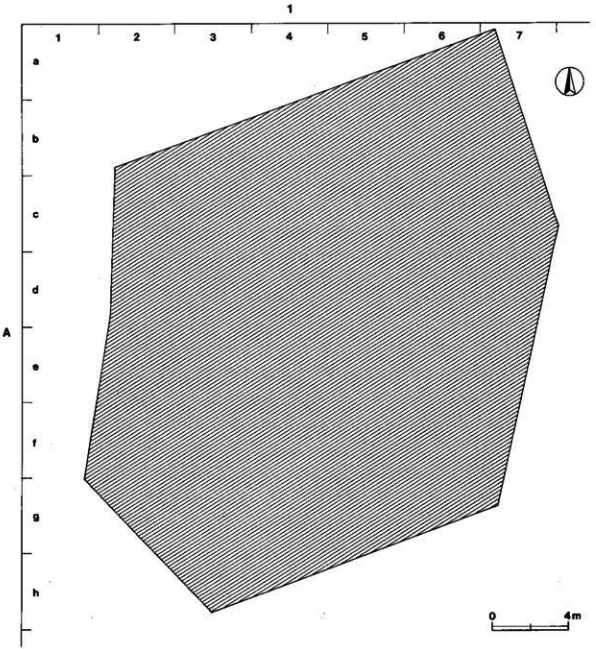
竪穴住居跡

当遺跡からは，古墳時代後期から奈良時代のものと思われる竪穴住居跡2軒が検出された。第1号住居跡は，遺跡の南部に位置し，南西部が調査区域外のため全体は検出できなかった。第2号住居跡は，遺跡の北部に位置し，北東部が傾斜しており，北東壁は崩れたのか立ち上がりは検出できなかった。平面形は，両遺構とも方形と推定される。規模は，一辺が4.6～5.40mの範囲内にあり，住居跡の大きさに差はない。主軸方向は，第1号住居跡がN－35°－E，第2号住居跡がN－34°－Wで，両方とも北方向を意識して構築されている。両遺構とも竈を持ち，第2号住居跡からは2基検出した。しかし，遺存状態から北西壁に付設された竈が中心で，西コーナー部の竈は補助的なものと推定された。出土遺物は少なく，土師器が中心で須恵器は極少量で，しかも小破片が多く実測できるものは少なかった。土師器片（甕・坏・土玉・土製支脚），須恵器片（壺）等である。出土遺物の少なさは，地形的にみた当遺跡の性格とも関連すると思われる。

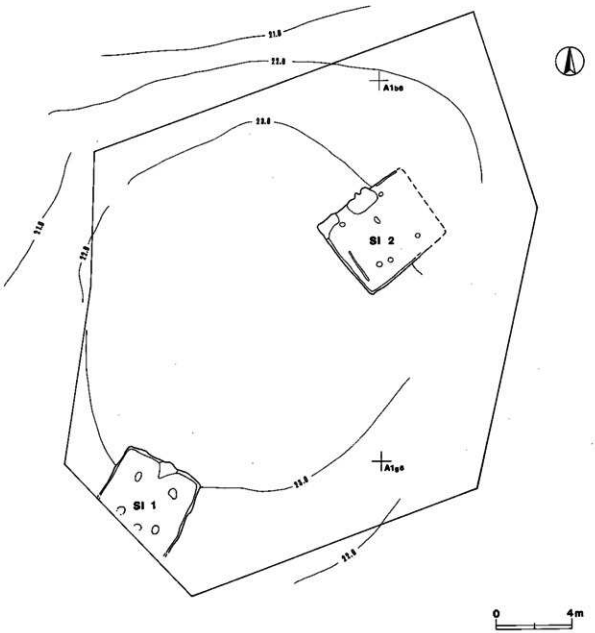
参考文献

・出島村教育委員会『出島村史』復刻版　1998年8月

・大正大学考古学研究会『鴨台考古　第4号』　1985年3月



第42図　船戸内遺跡調査区設定図



第43図　船戸内遺跡遺構全体図

作業風景（船戸内遺跡）

第5章　小原遺跡

第1節　遺跡の概要

小原遺跡は，霞ヶ浦町の北部，新治台地から延びる細長い台地上にあり，標高25～26mで，北側及び東側は水田に利用されている。水田との比高は約25mである。面積は537m²で，調査前の現況は畑地であった。調査区は便宜上，南から北へ1区から6区とし調査を進めた。

今回の調査によって，平安時代と思われる竪穴住居跡1軒，土坑4基検出された。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に15箱出土した。遺物は，平安時代の土師器・須恵器と，遺構は検出されなかったが，縄文時代中期を中心とする縄文土器片である。調査区域近くに縄文時代の遺構があったことが推定される。

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で，平安時代の住居跡1軒が検出されている。以下，住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第44図）

位置　調査区の南部（2区），G2d₅区。

規模と平面形　長軸3.88m，短軸（1.28）mであるが，東部及び西部が調査区域外のため，平面形は不明である。

主軸方向　東部及び西部が調査区域外のため，不明である。

壁　壁高は60～75cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み固められた部分は検出されなかった。

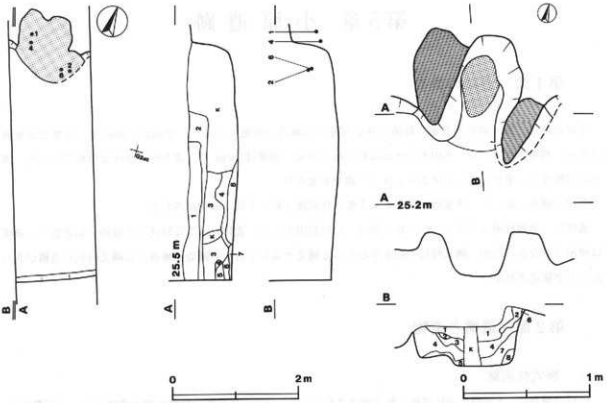
ピット　検出されていない。

竈　北壁を壁外に50cmほど掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの長さ95cm，最大幅120cmである。火床部は，床面と同じレベルの平坦面を使用し，かなり焼けて硬化している。煙道部は，火床面からほぼ垂直に立ち上がっている。

竈土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック多量，焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
2　明赤褐色　焼土大・中ブロック・焼土粒子多量，炭化物・ローム粒子微量
3　暗赤褐色　焼土中・小ブロック・ローム中・小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土大・中ブロック中量，炭化物・ローム粒子微量
5　赤褐色　焼土大ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック・ローム中ブロック中量，ローム小ブロック微量
6　褐色　焼土粒子・ローム小ブロック微量
7　褐色　ローム中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量
8　橙色　ローム中・小ブロック中量

覆土　8層からなり，覆土にロームブロック等を含み，また不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。



第44図　第1号住居跡実測図

土層解説

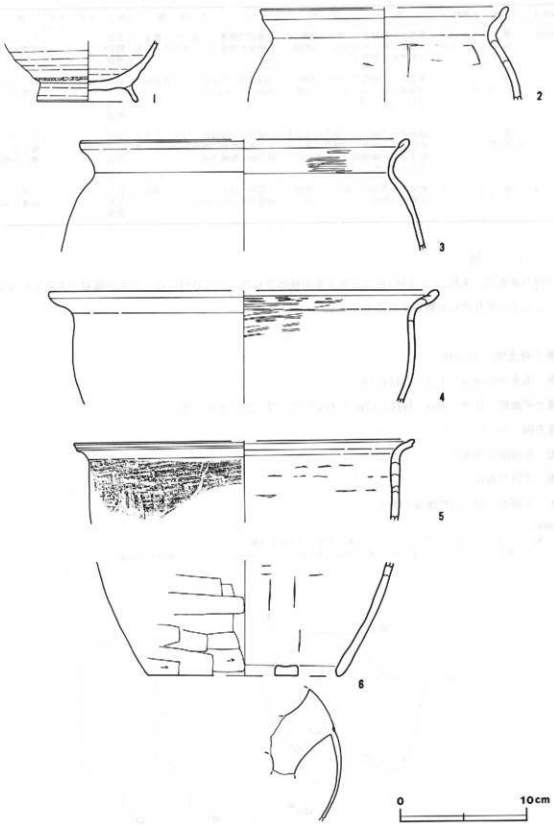
1　暗　褐　色　ローム中ブロック中量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム中・小ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，ローム中・小ブロック微量
5　黒　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，ローム中・小ブロック微量
7　黒　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
8　褐　　色　ローム大ブロック多量，ローム中ブロック少量

遺物　遺物は土師器片45点，須恵器片3点。縄文土器片6点が出土している。縄文土器片については，流れ込みと思われる。第45図1の土師器椀と4の土師器甕は，竈の覆土下層から出土している。2の土師器甕と6の須恵器甑は，竈の覆土中層から出土している。3の土師器甕及び5の須恵器甕は，覆土中から出土している。

所見　調査区域が狭く遺構全体は調査できなかったが，本跡の時期は，出土遺物から平安時代（9世紀中葉）と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第45図 1	椀 土師器	B（4.8） D 8.0 E 1.3	高台部から口縁部片。高台は短くハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。体部外面に強いロクロ目。	長石・石英・雲母・スコリア・パミス 橙色 普通	P 1 40% 竈覆土下層
2	甕 土師器	A（25.8） B（8.9）	体部から口縁部片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内面横ナデ後，ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	雲母・スコリア 橙色 普通	P 2 10% 覆土中層



第45図　第１号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 3	壺 土師器	A (30.8) B (8.9)	体部から口縁部片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内面横ナデ後，ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	雲母 橙色 普通	P 3 10% 表覆土下層
4	壺 土師器	A (19.6) B (7.3)	体部から口縁部片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面にヘラ当て痕。	長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 4 10% 表覆土中層
5	壺 須恵器	A (26.8) B (6.4)	体部から口縁部片。体部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口縁端部は，わずかにつまみ上げられている。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部外面に擬格子目叩き。体部内面に輪積み痕。	雲母 にぶい橙色 普通	P 5 10% 表覆土中 酸化焔焼成
6	甕 須恵器	B (9.1) C (15.4)	底部から体部片。多孔式。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端横方向のヘラ削り。	長石 灰色 普通	P 6 10% 表覆土中層

2 土　坑

今回の調査で，南部(1・2区)から土坑4基が検出された。これ以外には，土坑と確認できるものはなかった。ここではそれぞれの概要を記述する。

第1号土坑（第46図）

位置　調査区の南部（1区），H2b_9区。

規模と平面形　長径1.23m，短径1.17mの不定形で，深さ25～35cmである。

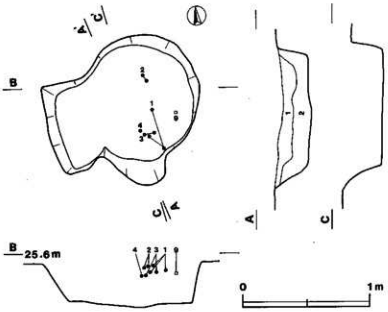
長径方向　N－85°－E

壁面　直線的に外傾して立ち上がる。

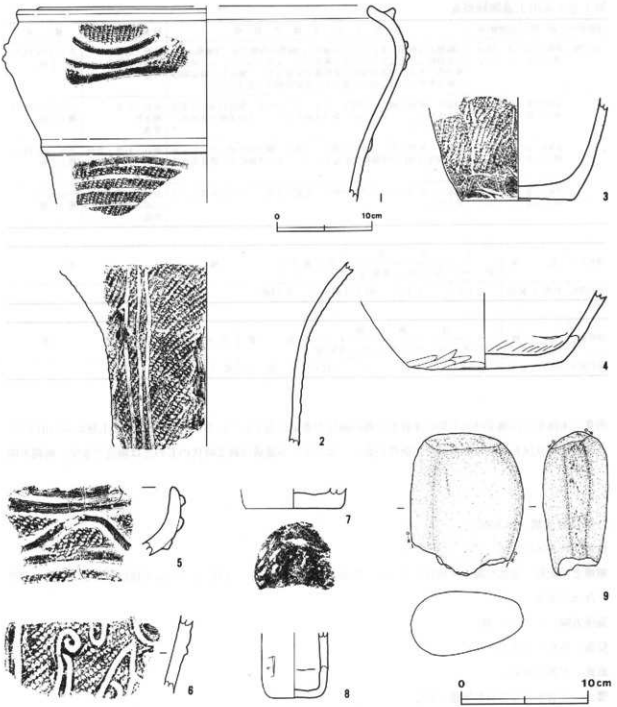
底面　平坦である。

覆土　2層からなる自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　にぶい褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム大・中ブロック・粘土粒子少量



第46図　第1号土坑実測図



第47図　第1号土坑出土遺物実測図

遺物　縄文土器片354点，不明土製品1点，磨石1点が遺構南部の覆土上層を中心に出土している。第47図1は深鉢形土器の口縁部片，3・4は深鉢形土器の底部片で南部の覆土上層から出土している。2は深鉢形土器の胴部片で，北部の覆土上層から出土した土器が接合した。5～7は本跡から出土した縄文土器片の実測図である。5は深鉢形土器の口縁部片でRLの単節縄文を地文とし，2本の平行する隆帯とその間を蛇行する隆帯で文様を描出している。6は胴部片でRLの単節縄文を地文とし，沈線で文様を施している。7は底部片で底面に網代痕が認められる。8の不明土製品は覆土中から出土している。9の磨石は東部の覆土上層から出土している。

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (34.8) B (20.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は内彎する。口縁部はRLの単節縄文を地文とし，2本の隆帯により文様を施している。頸部は無文帯である。胴部はRLの単節縄文を地文とし，頸部との境は幅広の隆帯を貼り付け，以下3条の太い沈線が横位に施されている。	長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P 7 10% PL14 覆土上層
2	深鉢形土器 縄文土器	B (14.5)	胴部片。胴部は緩やかに外反しながら立ち上がる。胴部はRLの単節縄文を地文とし，横方向に1条の沈線が巡り，3条の沈線が直線状に懸垂している。	長石・石英 褐灰色 普通	P 8 15% PL14 覆土上層
3	深鉢形土器 縄文土器	B (8.2) C 9.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴部はRLの単節縄文を地文とし，2条の沈線による懸垂文を施している。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P 9 10% PL14 覆土上層
4	深鉢形土器 縄文土器	B (6.0) C 12.4	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P10 10% 覆土上層

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		径 (cm)	長さ(cm)	重量(g)		
第47図8	不明土製品	(4.2)	5.3	(81.3)	覆土中	DP1

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第47図9	磨石	(11.3)	9.1	5.0	(742.6)	安山岩	覆土上層	Q1 PL15

所見　本跡からは縄文時代中期の深鉢形土器の破片が多量に出土しているが，いずれも覆土上層からの出土で，出土した状況からも投棄された可能性が高い。よって，本遺構は縄文時代のものとは限定できず，時期不明としたい。

第2号土坑（第48図）

位置　調査区の南部（2区），H3c_1区。

規模と平面形　東部が調査区域外となっているが，長径（3.32）m，短径（1.06）mで楕円形と推定され，深さ76cmである。

長径方向　N－6°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

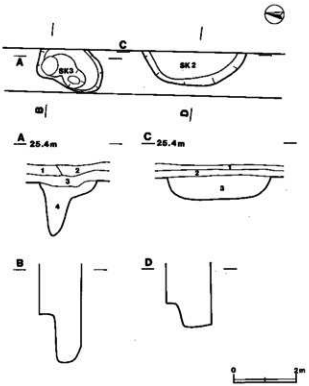
覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説

1　灰褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム大ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。



第48図　第２・３号土坑実測図

第３号土坑（第48図）

位置　調査区の南部（２区），H3b_1区。

規模と平面形　東部が調査区域外となっているが，長径2.16m，短径1.30mの不整楕円形と推定され，深さは150cmである。

長径方向　N－20°－E

壁面　中位に段を持ち，そこから外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　４層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は出土遺物がなく，時期不明である。

第４号土坑（第49図）

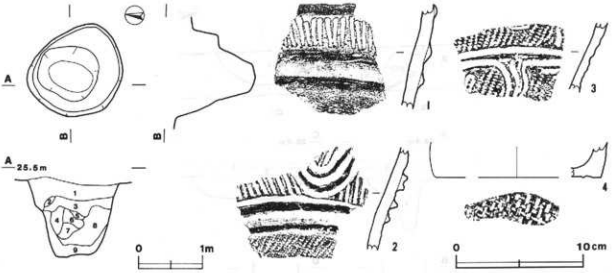
位置　調査区の南部（２区），G2h_6区。

規模と平面形　長径1.53m，短径1.39mの不整楕円形で，深さ40～113cmである。

長径方向　N－74°－W

壁面　中位に段を持ち，そこから外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。



第49図　第４号土坑・出土遺物実測図

覆土　９層からなり，不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

1	黒	褐	色	炭化粒子・ローム小ブロック中量，ローム小ブロック少量
2	暗	褐	色	焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック中量，ローム粒子少量
3	黒	褐	色	焼土小ブロック・炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
4	褐		色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
5	暗	褐	色	炭化粒子・ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量
6	黒	褐	色	炭化粒子中量，ローム粒子少量
7	暗	褐	色	炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
8	灰	褐	色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム大・中ブロック少量
9	褐		色	ローム粒子多量，炭化粒子・ローム大・中ブロック少量

遺物　縄文土器片35点が出土している。第49図１～４は本跡から出土した縄文土器片の実測図である。１は深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸部に２本１組の隆帯を巡らし，口縁部に縦位の沈線文を施している。２も深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸部に２本１組の隆帯を巡らし，口縁部には沈線を有する隆帯で文様を描出している。空白部には縦位の沈線を施している。３は胴部片でRLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。４は底部片で底面に網代痕が認められる。

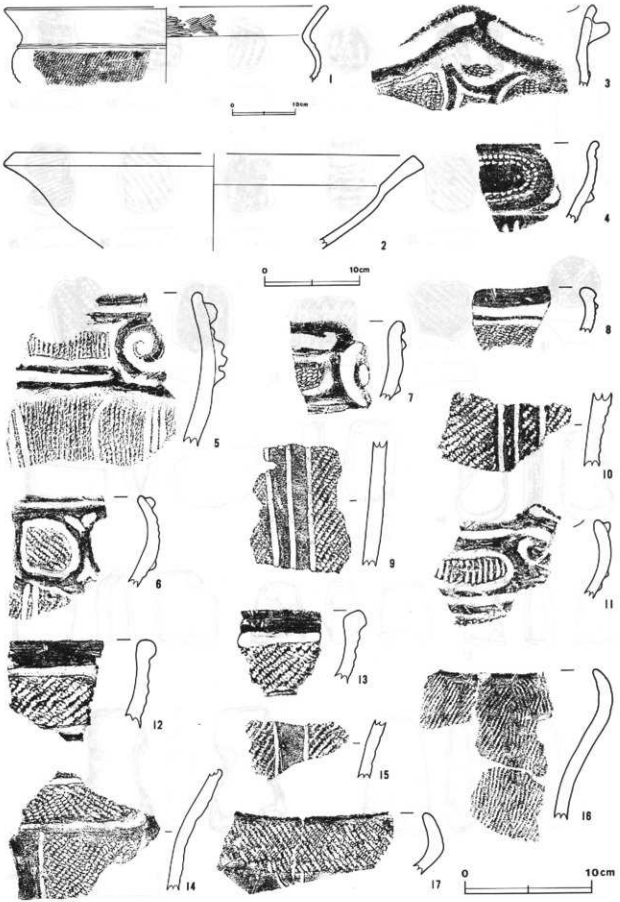
所見　本跡からは縄文時代中期の深鉢形土器の破片が出土しているが，遺物の出土状況や覆土の堆積状況からこれらの遺物は本遺構に伴うものとは考えにくく，投棄された可能性が高い。よって，本遺構は縄文時代のものとは限定できず，時期不明としたい。

表６　小原遺跡土坑一覧表

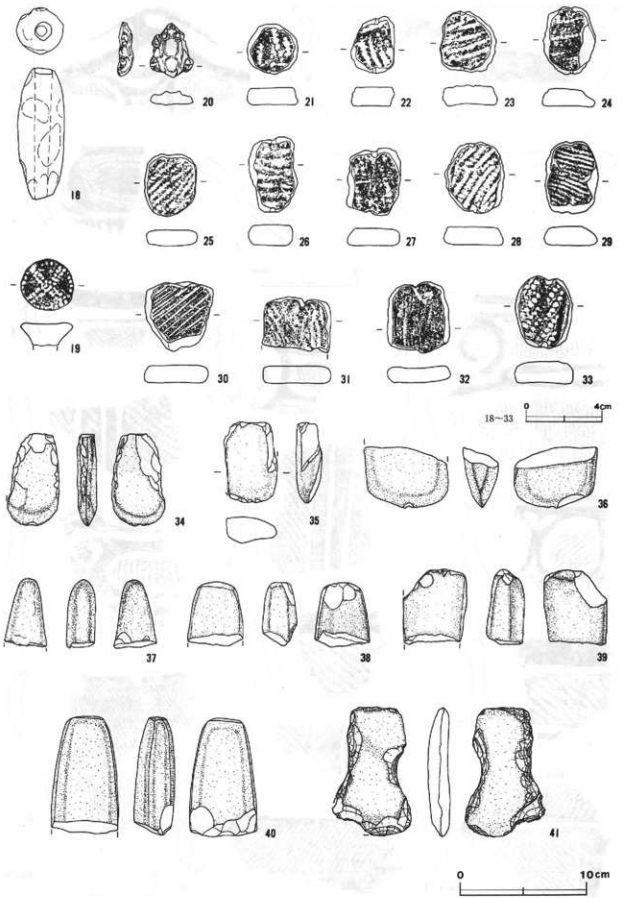
土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	$H2b_9$	N－85°－E	楕円形	1.23 × 1.17	25～35	外傾	平坦	自然	縄文土器片35点，不明土製品1点，磨石1点	
2	$H3c_1$	N－6°－W	〔楕円形〕	(3.32)×(1.06)	76	外傾	平坦	自然		
3	$H3b_1$	N－20°－E	〔楕円形〕	2.16 × 1.30	150	外傾	平坦	自然		
4	$G2h_3$	N－74°－W	楕円形	1.53 × 1.39	40～113	外傾	平坦	人為	縄文土器片35点	

３　遺構外出土遺物

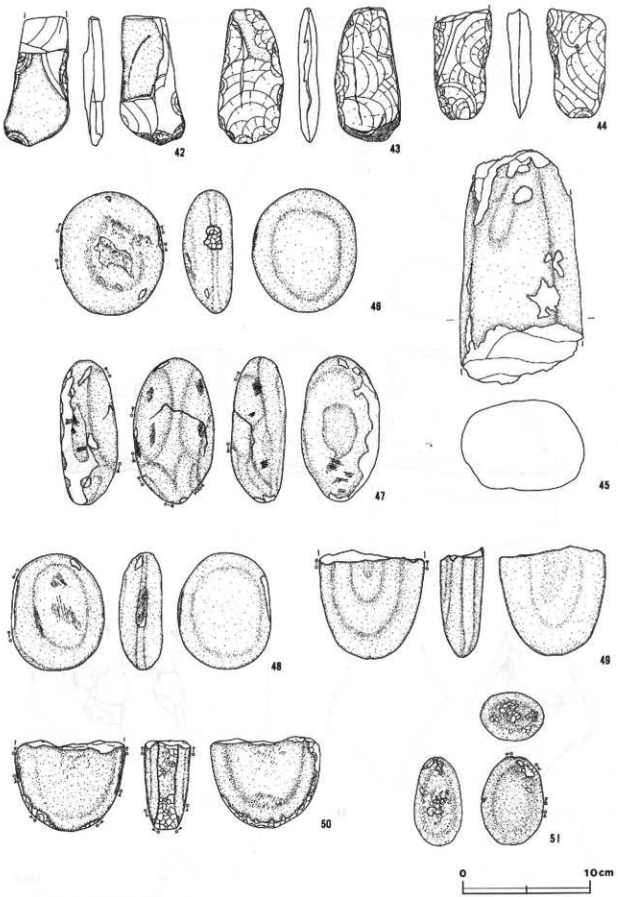
当遺跡からは，縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土しているが，特に遺構外から縄文時代中期の土器片が多く出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち，比較的遺存状態の良好なものを中心に掲載する。



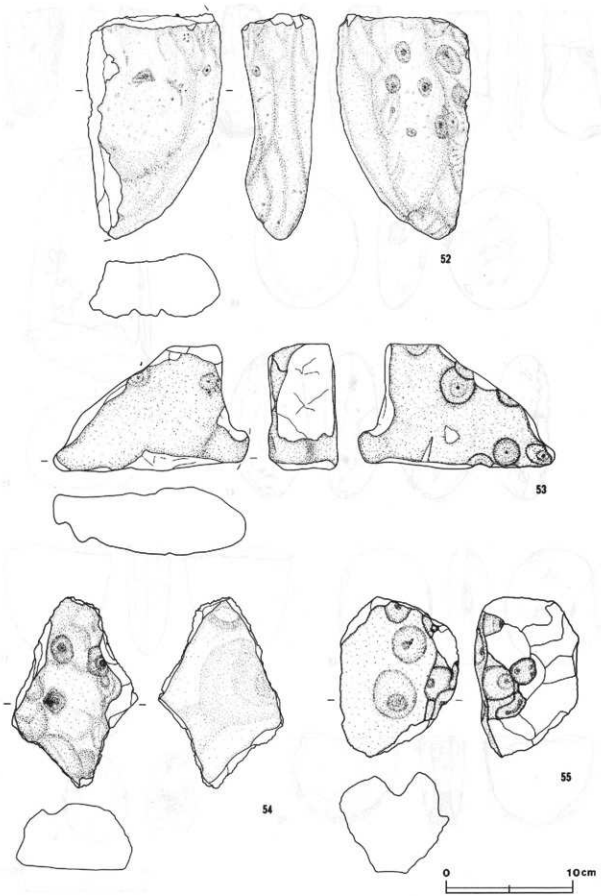
第50図　1区遺構外出土遺物実測図(1)



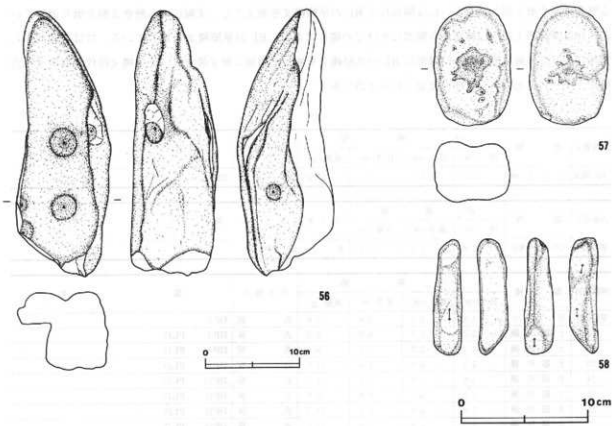
第51図　1区遺構外出土遺物実測図(2)



第52図　1区遺構外出土遺物実測図(3)



第53図　1区遺構外出土遺物実測図(4)



第54図　1区遺構外出土遺物実測図(5)

1区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (50.4) B (12.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。胴部は内彎し，口縁部は外傾する。胴部はRLの単節縄文を施文後，頸部に隆帯を巡らし，口縁部は無文帯にしている。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P13 10% PL14 表採 口縁部内面・口唇部に赤彩
2	浅鉢形土器 縄文土器	A (41.9) B (10.2)	胴部から口縁部片。胴部は外傾し，口縁部に至る。口唇部は肥厚し，平坦面を持つ。口縁部内側に段を持つ。無文である。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P19 10% 表採

第50～54図3～17は，調査1区の遺構外の縄文土器片の実測図である。3・4は深鉢形土器の口縁部片である。3は波状口縁を呈する口縁部片で，口唇部外面に隆帯を巡らし，口縁部にはRLの単節縄文を地文に隆帯で文様を施している。4は隆帯による楕円形の区画内に隆帯に沿って2条の結節沈線文が施されている。5～8は深鉢形土器の口縁部片である。5は頸部に沈線を有する隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。口縁部には隆帯により渦巻き文を描出し，胴部には撚糸文を地文とし沈線による懸垂文を施している。6・7は口縁部にRLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。8は口縁部片でRLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。9・10は深鉢形土器の胴部片である。9はRLの単節縄文を地文とし，沈線による3本1組の懸垂文間を磨り消している。10はRLの単節縄文を地文とし，沈線による3本1組の懸垂文を施している。11～13は深鉢形土器の口縁部片である。11は波状口縁を呈する口縁部片である。波頂部直下に沈線によりわらび手文を施している。12・13は隆帯による楕円区画文と考えられ，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。14は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部はRLの単節縄文を地文とし，隆帯と沈線により文様を描出している。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線によ

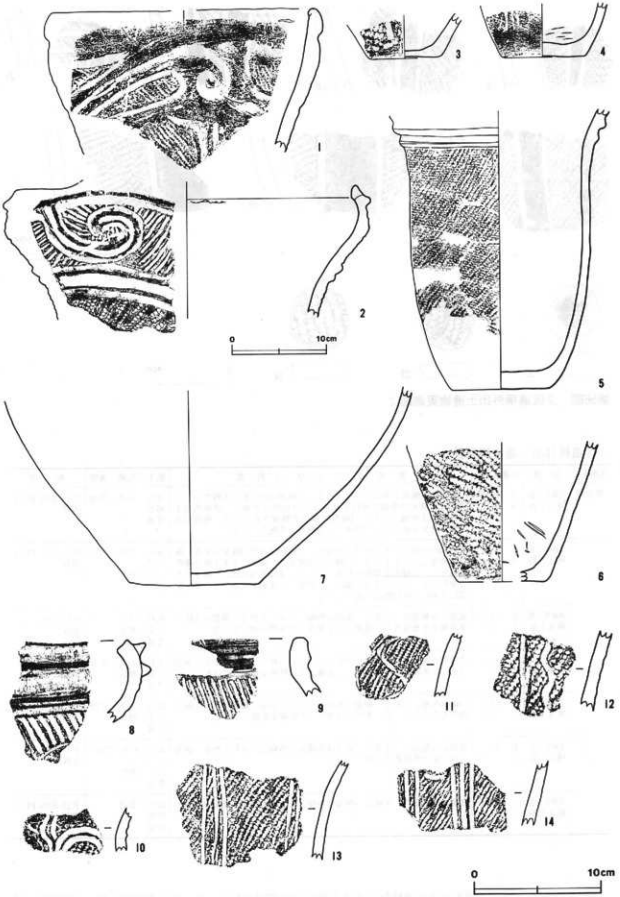
る懸垂文間を磨り消している。15は胴部片でRLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。16は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。RLの単節縄文を施している。17は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部はRLの単節縄文を施し，頸部は無文帯でる。3は縄文時代中期阿玉台式期に，4～17は加曽利E式期に比定される土器である。

図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第51図18	管状土錘	2.5	6.9	0.9	36.4	表採	DP3

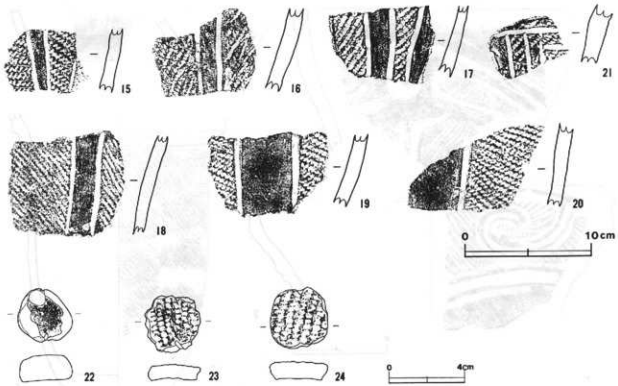
図版番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第51図19	スタンプ形土製品	2.8	(1.2)	(7.2)	表採	DP6

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考	
第51図20	泥面子	2.8	2.3	0.8	3.8	表採	DP5	
21	土器片錘	2.7	2.7	0.9	8.0	表採	DP7	PL15
22	土器片錘	3.0	2.3	1.0	9.0	表採	DP8	PL15
23	土器片錘	3.3	3.0	1.0	11.5	表採	DP9	PL15
24	土器片錘	3.6	2.8	0.9	11.7	表採	DP10	PL15
25	土器片錘	3.2	2.7	0.8	9.8	表採	DP11	PL15
26	土器片錘	3.9	2.6	1.1	13.3	表採	DP12	PL15
27	土器片錘	3.5	2.8	1.0	13.3	表採	DP13	PL15
28	土器片錘	3.8	3.2	1.0	14.5	表採	DP14	PL15
29	土器片錘	3.8	2.8	1.1	14.9	表採	DP15	PL15
30	土器片錘	3.7	3.5	0.9	14.8	表採	DP16	PL15
31	土器片錘	(3.0)	3.6	0.9	(14.3)	表採	DP17	PL15
32	土器片錘	3.8	3.3	0.9	13.6	表採	DP18	PL15
33	土器片錘	3.9	3.1	1.2	16.8	表採	DP19	PL15

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考	
第51図34	磨製石斧	(7.4)	4.3	1.6	(71.1)	凝灰岩	表採	Q2	PL15
35	磨製石斧	(6.4)	(4.4)	(2.0)	(93.3)	粘板岩	表採	Q3	PL15
36	磨製石斧	(4.8)	6.8	2.9	(132.7)	安山岩	表採	Q4	
37	磨製石斧	(5.4)	3.5	2.3	(61.7)	安山岩	表採	Q5	
38	磨製石斧	(5.2)	(3.9)	(2.8)	(94.7)	花崗岩	表採	Q6	
39	磨製石斧	(6.0)	(5.1)	(3.0)	(138.2)	硬砂岩	表採	Q7	
40	磨製石斧	(9.4)	5.4	3.2	(245.6)	安山岩	表採	Q8	PL15
41	打製石斧	10.3	6.3	1.8	142.1	ホルンフェルス	表採	Q9	分銅形 PL15
第52図42	打製石斧	(10.4)	5.2	1.6	(106.5)	粘板岩	表採	Q10	分銅形 PL15
43	打製石斧	10.8	5.3	1.7	125.9	ホルンフェルス	表採	Q11	分銅形 PL15
44	打製石斧	(8.7)	4.7	1.7	(97.1)	粘板岩	表採	Q12	分銅形 PL15
45	石棒	(18.7)	9.9	7.2	(1897.0)	安山岩	表採	Q13	
46	磨石	9.9	8.4	4.0	431.8	硬砂岩	表採	Q15	敲石兼用
47	磨石	11.6	6.4	4.5	463.1	安山岩	表採	Q16	
48	磨石	9.3	7.4	3.5	351.6	安山岩	表採	Q14	
49	磨石	(8.7)	8.5	3.6	(334.2)	安山岩	表採	Q17	
50	磨石	(7.3)	8.8	3.7	(351.3)	安山岩	表採	Q18	敲石兼用
51	敲石	7.1	5.1	3.9	18.1	安山岩	表採	Q19	
第53図52	石皿	(17.8)	(10.7)	5.9	(1126.1)	安山岩	表採	Q20	凹石兼用 PL15
53	石皿	(9.9)	(15.5)	5.4	(761.5)	安山岩	表採	Q21	
54	凹石	(15.1)	(10.0)	5.3	(852.6)	花崗岩	表採	Q22	石皿兼用
55	凹石	(12.7)	(9.5)	(7.9)	(705.5)	安山岩	表採	Q24	
第54図56	凹石	28.2	10.1	9.2	2665.4	雲母片岩	表採	Q23	
57	凹石	9.4	6.2	4.8	394.7	安山岩	表採	Q25	PL15
58	砥石	9.2	2.3	2.5	73.6	安山岩	表採	Q26	



第55図　2区遺構外出土遺物実測図(1)



第56図　2区遺構外出土遺物実測図(2)

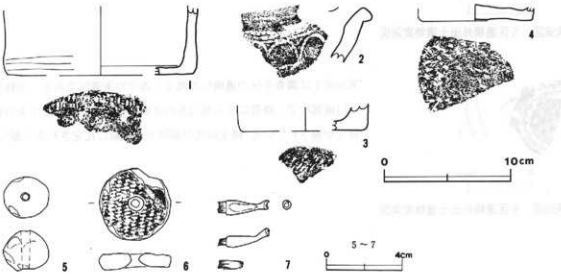
2区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (20.5) B (11.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部はわずかに内彎する。口縁部は沈線及び隆線で梅円形状あるいは渦状に区画し，区画内はLの無節縄文が施文され，口縁部文様帯が構成されている。胴部はLの無節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P11 10% PL14 表採
2	深鉢形土器 縄文土器	A (36.0) B (14.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は波状口縁を呈する。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。頸部に2本1組の隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内には，沈線を有する隆帯によりわらび手文を描出し，内部には沈線を充填している。胴部にはRLの単節縄文を施している。	長石・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P12 10% PL14 表採
3	深鉢形土器 縄文土器	B (3.5) C 5.6	底部から胴部片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴部はLRの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を磨り消している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P15 10% 表採
4	深鉢形土器 縄文土器	B (4.3) C 6.6	底部から胴部片。平底で，胴部はわずかに外傾して立ち上がる。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P16 10% 表採
5	深鉢形土器 縄文土器	B (22.0) C 7.8	口縁部欠損。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。頸部に2本1組の隆帯を巡らしている。胴部にはRLの単節縄文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P18 40% PL14 表採
6	深鉢形土器 縄文土器	B (11.0) C (7.0)	底部から胴部片。平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。胴部にはLRの単節縄文を施している。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P17 10% 表採
7	深鉢形土器 縄文土器	B (15.4) C 10.4	底部から胴部片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。無文である。	長石・雲母 橙色 普通	P20 30% PL14 表採

第55・56図8～21は，調査2区の遺構外の縄文土器片の実測図である。8・9は深鉢形土器の口縁部片である。8は2本1組の隆帯により文様を描出している。9は幅広の隆帯により文様を描出している。8・9とも

文様内には縦位の沈線が施されている。10は深鉢形土器の胴部片である。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。11・12は深鉢形土器の胴部片である。いずれもRLの単節縄文を地文とし，沈線により蛇行する懸垂文を施している。13・14は深鉢形土器の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による3本1組の懸垂文を施している。15～18は深鉢形土器の胴部片で，いずれもRLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。19・20は深鉢形土器の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。21は深鉢形土器の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第56図22	土器片錘	2.9	2.9	1.3	11.5	表採	DP20	PL15
23	土器片錘	3.1	2.9	0.9	8.8	表採	DP21	PL15
24	土器片錘	3.2	3.0	1.0	10.9	表採	DP22	PL15



第57図　3区遺構外出土遺物実測図

3区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	深鉢形土器 縄文土器	B（5.5） C〔14.8〕	底部から胴部片。平底で，周辺部を中心に網代痕が認められる。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P14 10% 表採

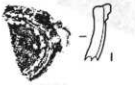
第57図2～4は調査3区の遺構外の縄文土器片の実測図である。2は深鉢形土器の口縁部片で，波状口縁を呈する。口縁部は結節沈線文で文様を描出している。3・4は底部片で，いずれも底面に網代痕が認められる。2は縄文時代中期阿玉台式期に比定される土器である。3・4は時期は不明である。

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第57図5	土玉	2.4	2.1	0.5	7.8	表採	DP2
6	紡錘車	3.8	3.7	0.8	12.5	表採	DP4

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	口径(cm)	重量(g)		
第57図7	土錘	(4.1)	1.1	0.7	(2.1)	表採	M1

第58図　5区遺構外出土遺物実測図

第58図1は調査5区の遺構外の縄文土器片の実測図である。深鉢形土器の口縁部片で，波状口縁を呈する。波頂部より隆帯を垂下している。口縁部には角押文が施されている。縄文時代早期茅山下層式期に比定される土器である。



第59図　6区遺構外出土遺物実測図

第59図1は調査6区の遺構外の縄文土器片の実測図である。深鉢形土器の口縁部片で，隆帯による楕円形の区画内に隆帯に沿って2条の結節沈線文が施されている。縄文時代中期阿玉台式期に比定される土器である。

第3節 ま と め

今回の調査では，平安時代の竪穴住居跡1軒，土坑4基が検出されている。土坑4基の内の2基から縄文時代中期の縄文土器の破片が出土しているが，遺物の出土状況や覆土の状態から縄文時代の土坑と限定することは難しいと思われる。ここでは，時代ごとに遺構・遺物の概要を述べ，まとめとしたい。

縄文時代

本期にあたる遺構は，検出されなかったものの，土坑や遺構外から縄文時代中期（加曽利EⅡ・Ⅲ式期）を中心にして，縄文時代早期（茅山上層式期）から後期（堀之内式期）にかけての土器片が多量に採集された。

小原遺跡周辺の縄文時代の遺跡は，当遺跡の南側では支谷を挟んで馬場平遺跡，安食平貝塚及び古酒遺跡が確認され，このうち安食平貝塚は調査されている。安食平貝塚は，ハマグリ・シオフキ・オキシジミを主体とする海水貝の貝塚で，遺物としては縄文時代中期から後期の阿玉台・堀之内・加曽利B・安行式期の土器片が出土しており，当遺跡の中心となる時期とは若干のずれがある。当遺跡の北側では，石岡市域に井関後遺跡があり，さらに支谷を挟んで道場平遺跡（貝塚），北垂遺跡（貝塚），北垂B遺跡，八幡原C遺跡が確認されているが，調査はされていない。調査例としては，当遺跡の北4.5kmの位置に大作台遺跡があり，縄文時代中期の住居跡2軒と土坑14基が検出されている。また，当茨城県教育財団が1979年から1981年にかけて調査した兵崎遺跡，大谷津A遺跡，対馬塚遺跡，大谷津B遺跡，大谷津C遺跡，外山遺跡がある。これらの遺跡は，当遺跡からほぼ真北に6km離れ，恋瀬川と園部川に挟まれた石岡台地を2分する山王川に臨む標高24m前後の台地の縁辺部に位置している。調査の結果，縄文時代前期から古墳時代後期の住居跡75軒が検出され，このうち縄文時代の住居跡は，前期が41軒，中期が16軒である。

以上のように，縄文時代の遺跡の調査例は少ないものの，当遺跡を含むこの地域が，縄文時代の人々の生活の場として広く利用されていたことが窺われる。

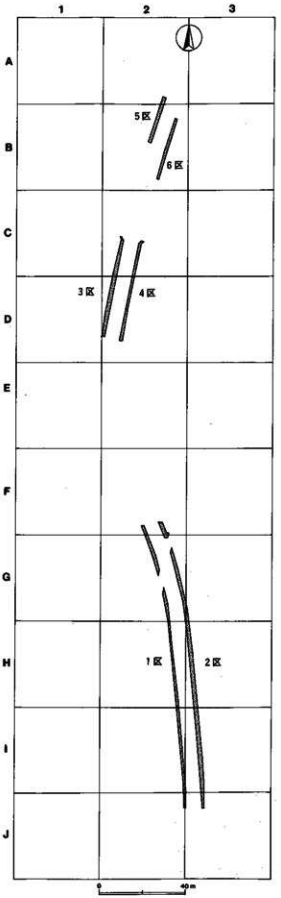
平安時代

本期にあたる住居跡は第1号住居跡で，遺跡の南部から検出されている。竈は検出されたものの，調査区が道路に沿って両側1m前後と狭いため，遺構の規模や平面形など全体を調査することはできなかった。竈については，天井部が崩落しており，両袖部が残存するのみであるが，白色粘土でしっかりと構築されていた。火床部は，レンガ状に赤変硬化しており，かなり長期にわたって使用されたようである。竈の前面から南部にかけて硬化面も検出された。

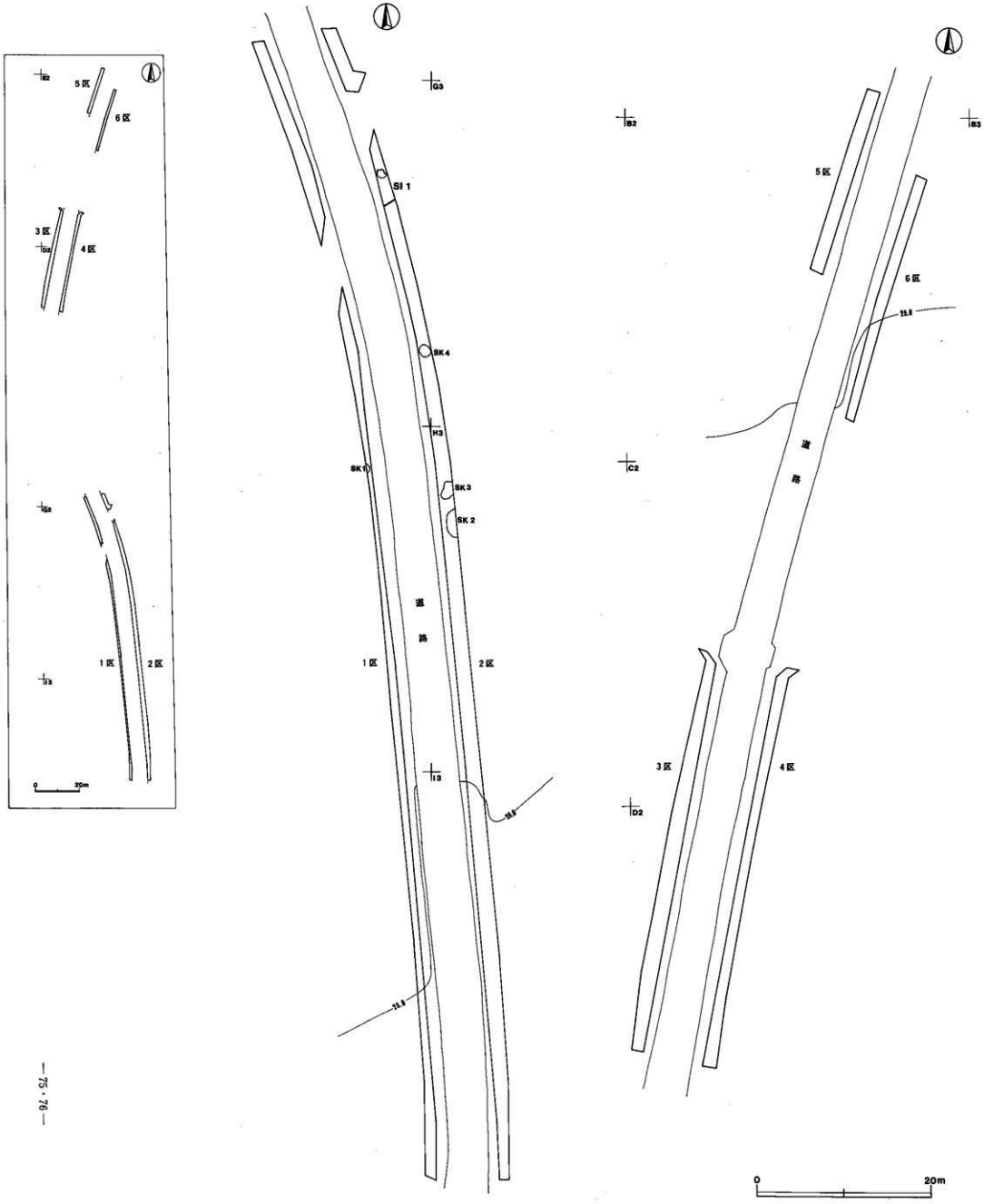
遺物は，土師器の坏片が23点，甕片が22点，須恵器の甕片が3点と，流れ込みと思われる縄文土器片が出土している。須恵器の出土量は少なく，土師器の椀や甕等から9世紀代（平安時代）の住居跡と思われる。しかし，当遺跡全体から出土する遺物としては，平安時代のものは少なく，集落として大規模なものではなかったと推定される。

参考文献

・出島村教育委員会『出島村史』復刻版　1984年11月
・石岡市史編さん委員会『石岡の歴史』　1994年11月
・茨城県教育財団「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　兵崎遺跡　大谷津A遺跡　対馬塚遺跡　大谷津B遺跡　大谷津C遺跡　外山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告XⅢ』1982年3月
・大正大学考古学研究会『鴨台考古　第4号』1985年3月



第60図　小原遺跡調査区設定図



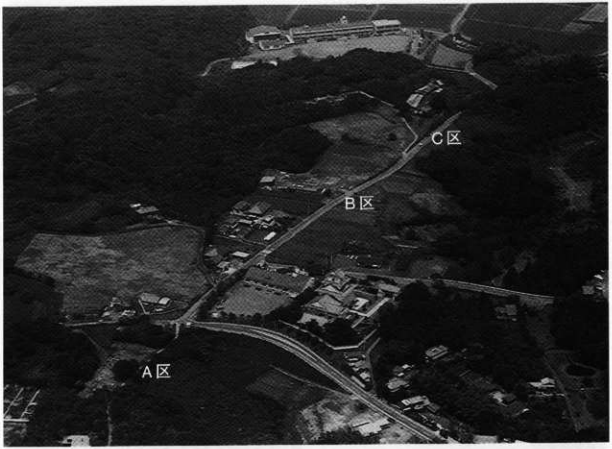
第61図　小原遺跡遺構全体図

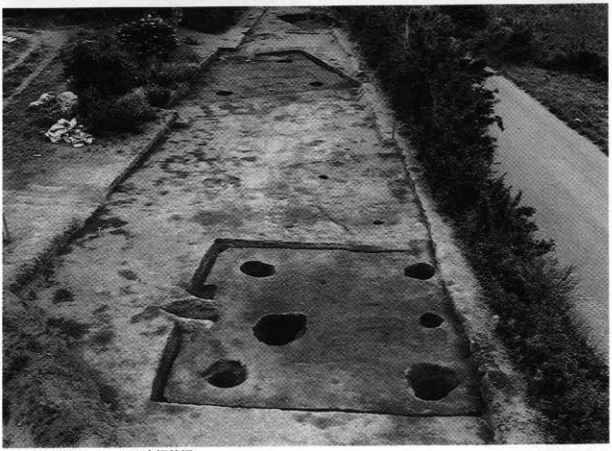
写 真 図 版

坂　　遺　　跡

船 戸 内 遺 跡

小　原　遺　跡



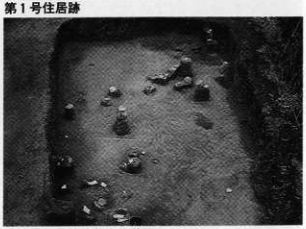


上 坂遺跡遠景，下 C区完掘状況

A区遺構確認状況

第1号住居跡

A区完掘状況

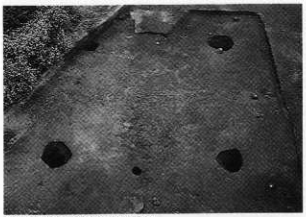

第1号住居跡遺物出土状況

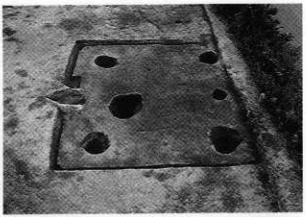
B区遺構確認状況

第1号住居跡竈

C区遺構確認状況

第2号住居跡


第2号住居跡遺物出土状況


第4号住居跡

第2号住居跡竈

第4号住居跡遺物出土状況

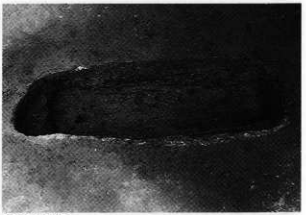
第3号住居跡遺物出土状況

第4号住居跡遺物出土状況

第3号住居跡竈

第4号住居跡遺物出土状況

第1号溝


第7号土坑

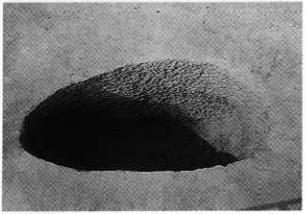
第1号溝遺物出土状況

第8号土坑

第1号溝遺物出土状況

第8号土坑遺物出土状況

第3号溝


第10号土坑

第11号土坑

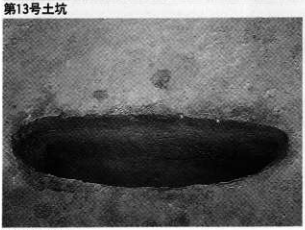
第15号土坑

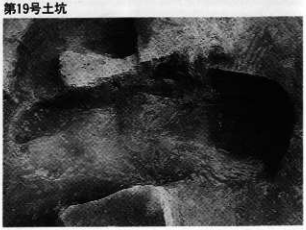
第12号土坑

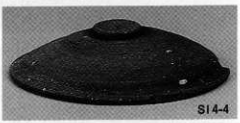
第17号土坑遺物出土状況

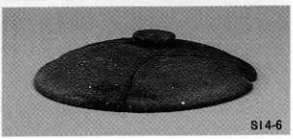
第13号土坑

第19号土坑

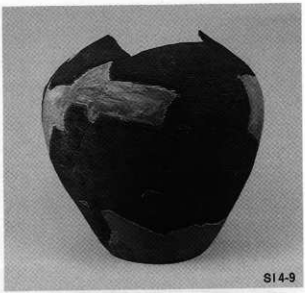

第14号土坑

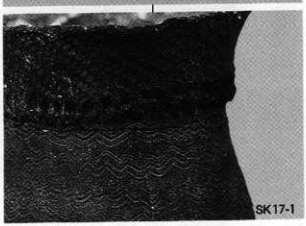

第20号土坑



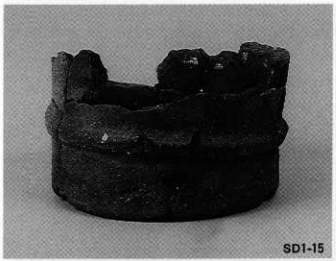


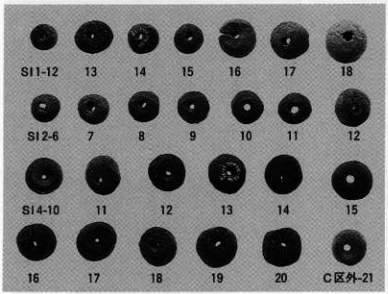
第１～４号住居跡出土遺物

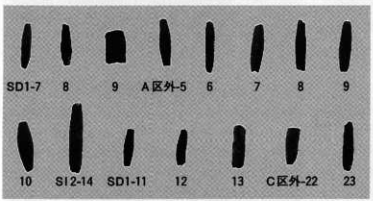


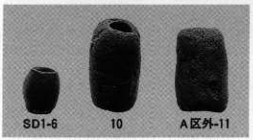


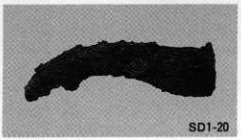
第4号住居跡，第1号溝，第17号土坑出土遺物



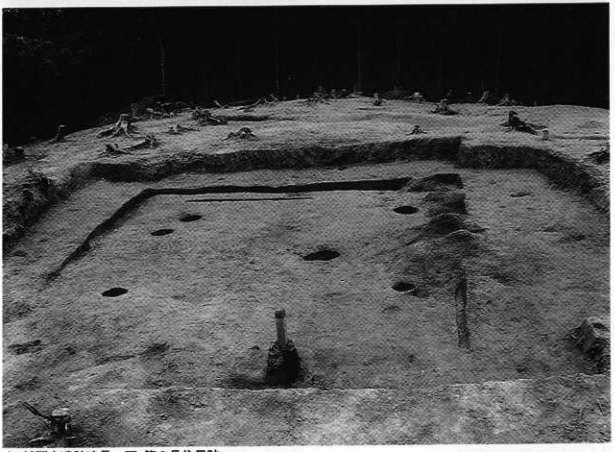




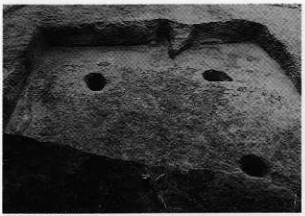




第1・2・4号住居跡・第1号溝・A・C区遺構外出土遺物

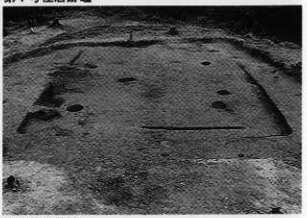


上 船戸内遺跡遠景，下 第2号住居跡


第１号住居跡

第１号住居跡竈

第１号住居跡

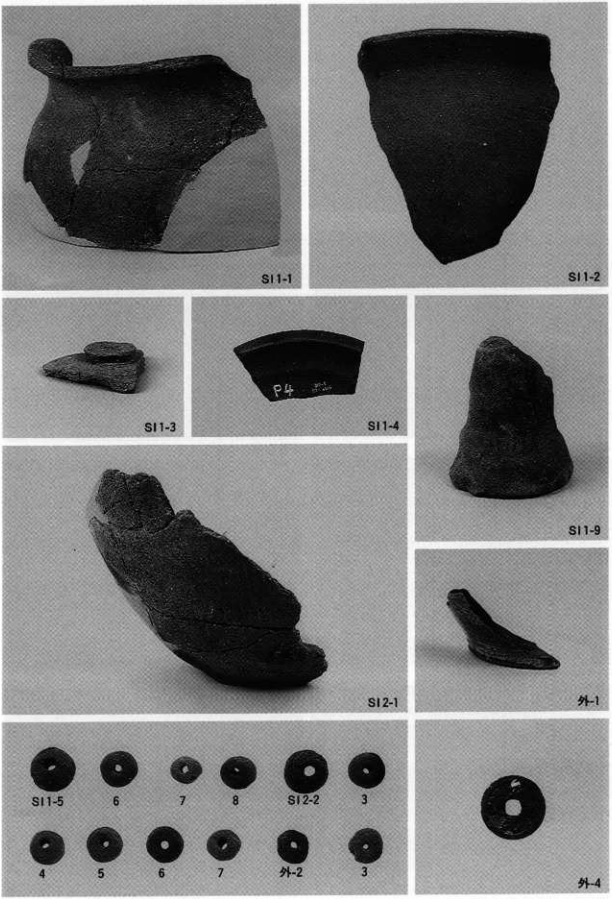

第２号住居跡

第１号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡竈Ａ

第１号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡竈Ｂ



第1・2号住居跡・遺構外出土遺物

第１号住居跡

１区南部遺構確認状況

第１号住居跡竈

１区北部遺構確認状況

第１号土坑

１区遺構外遺物出土状況

第１号土坑遺物出土状況

１区遺構外遺物出土状況

2 区南部遺構確認状況

4 区遺構確認状況

2 区遺構外遺物出土状況

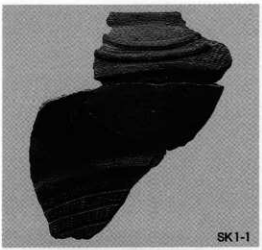
4 区遺構確認状況

3 区遺構確認状況

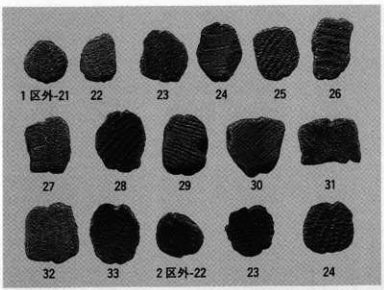
5 区遺構確認状況

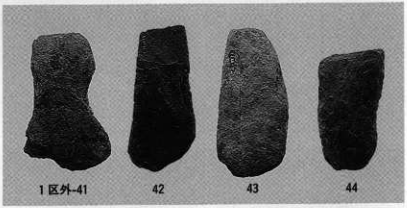
3 区遺構確認状況

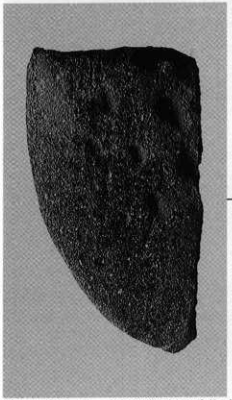
6 区遺構確認状況

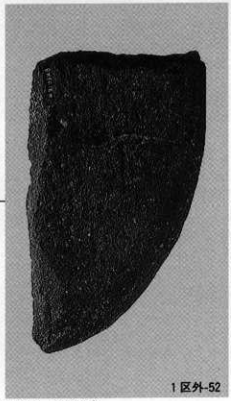


第１号土坑・１・２区遺構外出土遺物（縄文土器）

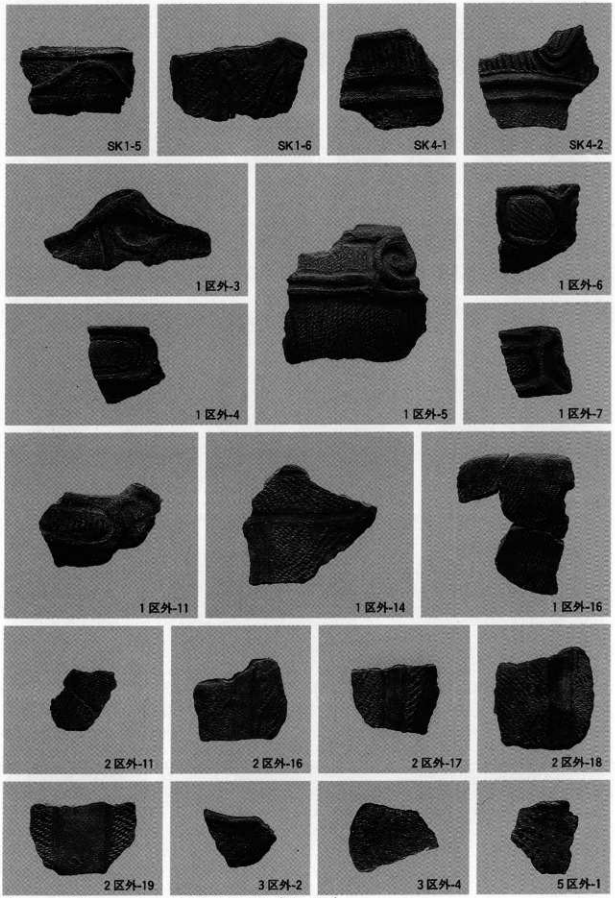








第１号土坑，１・２区遺構外出土遺物（土製品，石製品）



第１・４号土坑・１～３・５区遺構外出土遺物（縄文土器）

茨城県教育財団文化財調査報告第148集

一般県道石岡田伏土浦線道路改良
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

坂　遺　跡
船戸内遺跡
小　原　遺　跡

平成11(1999)年3月16日　印刷
平成11(1999)年3月19日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
TEL　029－225－6587
印刷　(有)　川　田　プ　リ　ン　ト
〒310-0041　水戸市上水戸1丁目4－53
TEL　029－253－5551